

分散会 1

ファシリテーター 武智 理恵
花井 裕紀
玉置 尚寛
分散会記録者 金山 明弘

あおばコミュニティ・テラス

あおばコミュニティ・テラス

発表者 佐竹 優芽、平井 七海、奥田 結菜

あおばコミュニティ・テラスとは、学校でも家庭でもない「中・高校生世代のサードプレイス居場所」として青少年の地域活動拠点となっている場所である。まちづくりの活動「あおば未来プロジェクト」では中高生 22 人がそれぞれの思いを持って参加し、地域課題解決やまちづくりに取り組んでいる。大学生がサポートし、課題意識の共有、地域に出かけてのリサーチ、活動の企画運営をしている。そのプロセスでチームになり、多くの出会いと学びがあり、まちづくりにつながっている。商品開発チームでは、青葉区の特産品である浜なしを使った商品を考えて。今後はドライ浜なしとアイスをコラボさせたアイスや梨の皮を使った香水などの商品化を目指して活動していく予定である。

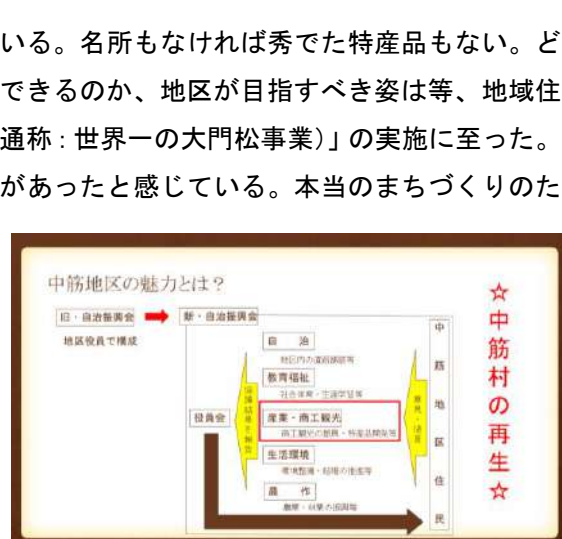


世界一の大門松

~中筋地区を知らしめる事業~

西予市中筋公民館 発表者 兵頭 智

平成 27 年 3 月末をもって、地区の核の一つである小学校と幼稚園が閉校・閉園し、地域から子どもの声が消え、「さみしくなった」という声をよく聞くようになった。また、若者は利便性を求め地区外へと引っ越し、地区離れが進行している。名所もなければ秀でた特産品もない。どうすれば人が集まるのか、地区が活性化できるのか、有名にできるのか、地区が目指すべき姿は等、地域住民との話し合いを幾度も重ね、「中筋地区を知らしめる事業（通称：世界一の大門松事業）」の実施に至った。観光客も年々増え、メディアにも取り上げられ、一定の効果があったと感じている。本当のまちづくりのために、地区のリーダーの育成、郷土愛の醸成など SNS を利用して情報を発信している。今後は違ったやり方での情報発信も考えている。



<質疑応答>

<あおばコミュニティ・テラス>

- Q パン屋さんなどの青葉ブランドの店舗をめぐる、活動し体験を通して得たものはあるか。
- A 行動力が身に付き、地域の方の温かさを感じた。
- Q あおばコミュニティ・テラスの主催はどこか。
- A NPO 法人。
- Q あおばコミュニティ・テラスの中高生は、自らが応募して組織に入るのか。
- A 自分たちが自主的に応募している。
- Q 横浜市の行政の委託を受けているのか。
- A あおばコミュニティ・テラスは横浜市の施設で、青少年の地域活動拠点の1つ。その中の事業の一つとして未来プロジェクトがある。
- Q 活動に取り組む時間について、時間の捻出などどのようにしているのか。
- A 好きな時に参加したり、部活の代わりに参加したりしている。大体は事前に活動時間などを打ち合わせをして集まっている。
- Q 商品開発は大人から言われてやっているのか、それとも自発的にやっているのか。
- A 自発的に、同じ考えを持った人が集まって活動している。問題解決なども自分たちが自主的に考えて活動している。
- Q 地域づくり活動をされていて楽しいと思っていることでしょうか。将来的に自分の地域でこんなことやりたいな、都会に出たいなと思っているのか。高校生としてどう思っているのか。
- A 都会に出たいとは思っていないが、今やっていることが将来的につながっていけばいいなと思っている。田舎の方で地域活動をしていきたいと思っている。中学生だが、将来的な予想はできないが、一回は都会に出てみたいと思っている。最終的には地元で活動したいと思っている。
- Q あおば未来プロジェクトは他にもあるが、チーム間の交流はあるか。
- A 一か月に一回の定例会がある。それぞれの活動を報告している。
- Q 他地域の高校生との交流はあるか。
- A 今のところ交流はしていない。
- Q 他県との交流があまり無いとのことであったが、野村の団体とオンラインでぜひ絡んでほしいと思う。要望だが、交流の輪を広げてほしい。
- A 今後インスタなどSNSを開設する予定である。

<西予市中筋公民館>

- Q 地域を愛する子どもたちを育てていきたいと思っている。その中で、今回の発表を聞いて、地域を愛する子ども、人たちを作っていくんだという強い思いを感じた。門松づくりを実行委員形式に変えられたということだったが、私の勤務する小学校でも現在、地域と子どもでいっしょに遠足をする「ふるさと遠足」を考えている。その際に、実行委員会形式で行いたいと思っている。どのように実行委員を集めたのか教えてほしい。
- A 選ぶ人は、地域の方が選出してきた。地域の方がリーダーになりそうな人に声を掛けている。地域の方が主となって活動している。

- Q 大門松がすごいと思った。過去4回やってきて、観光客の人数は増えたのか。
- A 増えている。当初は800人だったが現在は1000人を超えている。昼間はデイサービスの方たちが見に来られることもある。ライトアップされている時期(2週間)は増える傾向にある。
- Q 行政職なので、今後異動があると思われる。システムが自転していく仕組みづくりについてどのようになっているのか教えてほしい。
- A 西予市には担当職員制度がある。現在中筋地区には5人担当職員がいる。入れ替わりがあっても、残った職員が新しい職員に伝えられるようにサイクルを回している。
- Q 西予、田舎暮らしのコーディネーターについて、専門の方を募集しているのか、それとも一般の方でもOKか。
- A 面接をして採用になれば最長3年働くことができる。一般の方でも募集できる。
- Q 世界一の門松、予想を上回る大きさにびっくりした。全ての世代が関わっていてすばらしいと思った。地区のリーダー養成とあったが、どのように育成しているのか。最初の方はどのように手を挙げられたのか。地域愛について、学校とどのように連携しているか。
- A 地区のリーダーについて、そもそも地域の方からやってみようと呼びかけられた。「大きい物つくってみるか。」「やってみましょう。」という流れであった。そしてその方がリーダーになった。次のリーダーについてはその方が、候補を見つけてきてくれる。自分から絡んでいっても根深いところまでは分からないので、地域の方に任せてしていただくことも大切だと思う。地域の方とはお酒の席でも親睦を深め、コミュニケーションを図っている。
- 学校との連携については、現在、中筋地区には学校が閉校している。そのため、隣の大きな小学校へ行くことはある。門松を作る技術など学校の方へ持ちかけて、関わっていった。

- 感 どのように住民主体にするのか、火をつけるのか、乗せ方など、地域の方とのつながり方が上手だと思った。
- 感 とてもすばらしい事業であった。門松が気になっていたが、さすが世界一の門松だと思った。その中でこれだけ大きい門松を作っていく継続性の大変さも感じた。自分の公民館では自治会が門松をつくっている。門松の周りの葉牡丹は小学生が公民館にお手伝いに来て飾ってくれることが恒例となっている。今回の発表を聞いて、自分たちの公民館でもバージョンアップした門松を作れるように努力したい。

<全体を通しての意見感想等>

- Q いろんな立場から、今回の分散会を見て今後の地域との交流等についての課題を教えてください。
- A コミュニティスクールについて、コロナ禍で地域と交流ができていない。来年度は何ができるか考えたときに、ふれあい遠足の話が上がった。公民館を巻き込んで来年度は実行したい。しかしながら、コミュニティスクールの活動が中々進んでいないことが課題であると感じている。
- A 高齢者のみなさんが培ってきた技術などを子どもたちに伝えてほしい。いろんな技術を持った高齢者が学校に行き、伝える事業をしている。例えば、雑巾の縫い方、コマ回し等の昔の遊び、なんでもOKだと思っている。このことを通じて、子どもたちが地域に出てきてくれるようになった。それが門松の飾り付けに繋がった。こういった事業を通じて地域の教育力を高めたいと思っている。辛いときがあった時など地域を思い出してほしい。門松づくりも30年続いているが他にも風揚げ

など 20 年間続いている。またいろいろ教えてほしい。

- A 鳥取県もふるさと教育に取り組んでいる。学校が積極的に関わってくれるといいのだが、学校の先生の目の前の子どもたちのためになるのか、現場の先生方の負担となっていないか気がかりである。そのようなことも含め、子どもたちの成長につなげていけるように学校の先生と、社会教育の合同の研修会などあればよい。いろんな組織とタッグを組んでいくことが大切だと考えている。
- A みなさんの質疑応答を見ていて、みんな繋がっていくなと思っている。もしかしたら青葉の高校生たちも将来的に西予市民になっていることもあるかもしれない。交流の中で、新しい繋がりができるといいと思った。みなさんと今後繋がってやっていけるといいなと思っている。青葉の商品が西予で売れると面白い。
- A 愛媛県は東予、中予、南予に分かれている。東予では高校生のまちづくりを発表してもらっている。Zoom を活用して青葉も方にも参加してもらったら交流の枠が広がると思う。
- A オンラインだからこそその繋がり方がある。全国のみんなが同じ時間に集まれることはすばらしいなと思った。
- A 九州でも交流会がある。私の勤務する公民館では、小学校と公民館が隣接している。先生方との関係も良い。お助けデーというのがあり、月に何度かお助けデーの旗が上がったら、子どもたちが公民館のお手伝いをしてくれる。子どもたちが地域のボランティアをしてくれるようになってから、地域の行事に参加してくれるようになった。ただ参加するだけでなく、お手伝いをしてくれるようになった。中学生になったら次のステップのお手伝いをしてくれるようになった。しかしながら、高校生になると参加が少ない。高校生をいかに引き込むかが課題である。



分散会2

ファシリテーター 西川 浩司
分散会記録者 橋本 圭右

小さな町の小さな挑戦

松野町 せいけ企画 ACCELE 発表者 川嶋 健佑

「ひとりでは一歩踏み出せないけど、みんなとなら一歩踏み出せる、そんな場所があったらいいね」から立ち上がった。そんな場所、スペースを借りるところから始まり、一軒の空き家を改修することがスタート。ここに遊びに来る人が、その人たちが夢を実現する。例えば、中学生がライブをしたいという思いがあって、中学生自身が中心となって、地域の大人も巻き込んでプロデュース。それをきっかけに、松野町のコミュニティセンターや中学校を貸し切って、ライブをしたりすることができた。ほかにも、ALTの先生が、みんなで特殊メイクをしてハロウィンをしたいという話から、特殊メイクの授業や体験を企画。そしてハロウィン当日には、ゾンビ役の人が鬼になり、鬼ごっこをするなど、イベントもすることができた。せいけという場所で誰かのつぶやきで企画し、それがACCELE（加速）させればという思いでこの名前をつけている。



Assemble(あつまる)
Comfortable(心地よい)
Challenge(挑戦する)
Enjoy(楽しむ)
Learn(学ぶ)
Earn(稼ぐ)

ごく普通の私たちにもできる型にはまらない地域活動

徳島県 ぴーなっつ 発表者 田貝 妙子

ぴーなっつとは、PTA 活動を通じて活動する良さを感じた母親四人が、子どもたちのために何かしようとして立ち上げた団体。ボランティアグループとして社会福祉協議会に団体登録。児童館を無料で使用できるようになり、劇などの練習ができるようになった。その後、コロナで活動ができなくなるが、オンラインを駆使して、マスク手作り、手洗い動画などを作成、発信。その後、活動再開してからも、体験教室やイベント、紙芝居や絵本製作、防災アートイベントなど、たくさんの活動を行ってきた。今は11人のメンバーで活動。あったらいいな、やってみたいなという考えから、考えて行動し、実現することで日常生活では味わうことのできない達成感を感じている。この活動を通じて、社会の仕組みを学んだり、人間力を養ったりしていると感じる。生涯教育・生涯学習の意味を体感・理解している。

ぴーなっつ結成から現在まで④



ぴーなっつ結成から現在まで⑤



<質疑応答>

<せいけ企画 ACCELE>

Q 活力がとてもあると思います。学校等地域との結びつきのきっかけは？

A 周りの方が受け入れてくれることが多かったのが大きいと思います。中学生との関わりがあって、それが大きくなって、どのような団体かというのを説明にあがったことが結びつきのきっかけになった。

Q 子どもが途切れずに集まる場所を作るときに工夫していることは？すべての層の人も巻き込むのにどのような工夫をしているのか？

A まだそこまでの段階にいてはいないのが現状ですが、これからどのようにして巻き込んでいくかが課題。せいけのラインがあって、いろいろな企画を投げかけて、それに反応してくれる人がさらに周りに広げてくれる。大人はお酒があると、集まることも多い。

Q コアメンバーは何人いて、常時いらっしゃるのか？場所があっても人がいないとなかなか集まらないのでは・・・？

A 地域おこし協力隊が1人いて、その人が常時いて、対応していただいている。コアメンバーは3人。

Q 大変な面は？

A ミーティングがなかなかそろわないなど、コミュニケーション速度が落ちているところが問題。

<徳島県 ぴーなっつ>

Q 自分たちの活動をどう魅せるかが大事。多彩なメンバーが集まっているが？

A 趣味で好きなど、やってみようかなと思う人に任せている。任せられると、思った以上の結果が出る。

感 一人ひとり新しいことにチャレンジしているんだなと思いました。

早寝早起き朝ごはんは学校では言えない。子どもたちにとって朝ごはんは自分の責任ではないので、悲しい思いをすることがある。田貝さんのような立場の方が言ってくれるのがすごくありがたい。

感 活動していて、分からないことがたくさんあったということだったが、下手にでる必要はなく、こういう仕組みがある、このように取り組めばよいなど、このような活動をしている人たちに対して、行政がもっとやらなければならないと思う。

Q 今、している活動は？

A 子供向けの防災イベント。もっとたくさんの人にきてもらいたい。イタノザウルスの肉付けは、子どもたちを巻き込んでやるイベントだったが、コロナの影響で、大人だけで行った。今後もこのイタノザウルスを使ってイベントを考えている。全世代体操「るんるん体操」も、ケーブルテレビと連携して行っている。卒業式映えスポットも、コロナの中で楽しいものになるように考えている。

Q メンバーが増えた経緯について

A 社交的な人や、そうではない人などいるが、話をしている中で、この人は?!という人がいたら、誘ったりしている。子どもたちにとって「あったらいいな」を考えている。

感 保護者の方にとっても、あったらいいなという場所づくりにもなっていると感じた。

Q 協力団体の高齢化が、公民館で働いていて思う問題。働いているお母さん方は、声をかけるのにためらってしまう。中には地域活動に積極的に参加したいと思っている人もいると思うか。

A これがなかったら、行政から投げかけられてもやってないかもしれない。「これをやりたい」というのが

あったから。なかなか難しい問題かもしれない。でも、熱量の高い公民館の方に出会えてうれしい。これから変えていってほしい。

<全体を通しての意見感想、その他活動事例等>

《おのみち寺子屋》

コロナ前は、こどもたちと100km歩く活動をした。また、社会に出て必要なマナーなどを身につけるような活動もしている。その後、コロナの影響でできなかったときは、ZOOMでできるアイスブレイク的なゲームを作った。ゲームの中で、ZOOMの使い方などが学習できるようになっている。離れていてもつながっているということを感じさせたい。42, 195km歩くことと、学習機会の二つを考えていたが、コロナ禍でなかなかうまくいかなかった。学習機会として、対面型とオンラインとで取り組みを今後は考えている。

Q しっかりしていると感じた。何回くらいされていて、組織のつながりなどは？

A 今年が19回目。青年会議所からスタート。3年目から学生からスタートになった。どうやったら人が集まるかを考え、自分たちで春と秋に募集活動をしている。

Q いろんな大学でされているが、全体で何人いて、どうコミュニケーションをとっているのか。

A 45人。連絡はメール。ラインのほうが使いやすいが、事務局がどんな状況か把握しておきたいことと、社会に出た時のことを考え、メールにしている。

感 まさに、人間力の向上だと思う。

Q この活動はボランティア？自分が大学生のころは、そんなことはなかった。すごいと思う。

A ボランティアです。

《松山市東雲公民館》

最近でいうと、文化祭。コロナ禍で飲食等はできなかったが、小学校とも連携して作品等を掲示したり、地域住民の方もたくさん参加していただき、展示だけでもよかったよと言ってくださったり、これからも続けてねと声かけてもらって、地域とのつながりを感じたイベントであった。コロナ禍でもできることを探しながら、地域の人々の心のありどころでありたい。

感 公民館でも、公民館主事がいなくて人が行きづらいところもあるというのが現状。コロナ禍ではあるが、今後様々な活動を通して、盛り上げていきたい。

Q 成人式も今後あるので、地域の方のために何かできることを考えたい。何か考えていることは？

A 地元住民の方に安心して行えるように、コロナ対策を考えているところ。PCR検査だったり、席の間隔だったり…

Q 小中高生を巻き込んだ行事などは？

A 松山市では交流する機会があるが、今後もっとできたらよいなと思っている。

感 選挙でいだけ・・・ではなく、人が集まるような場所になればよいと思う。

Q 若い世代に来てもらうために取り組んだことはありますか？

A 公民館も、人によって熱量も違うので取り組み方は違うが、廃れていってほしくない。今あるつながりから派生させられるように、自分から地道に発信してみる。それが真珠の活動にもつながった。学生さん

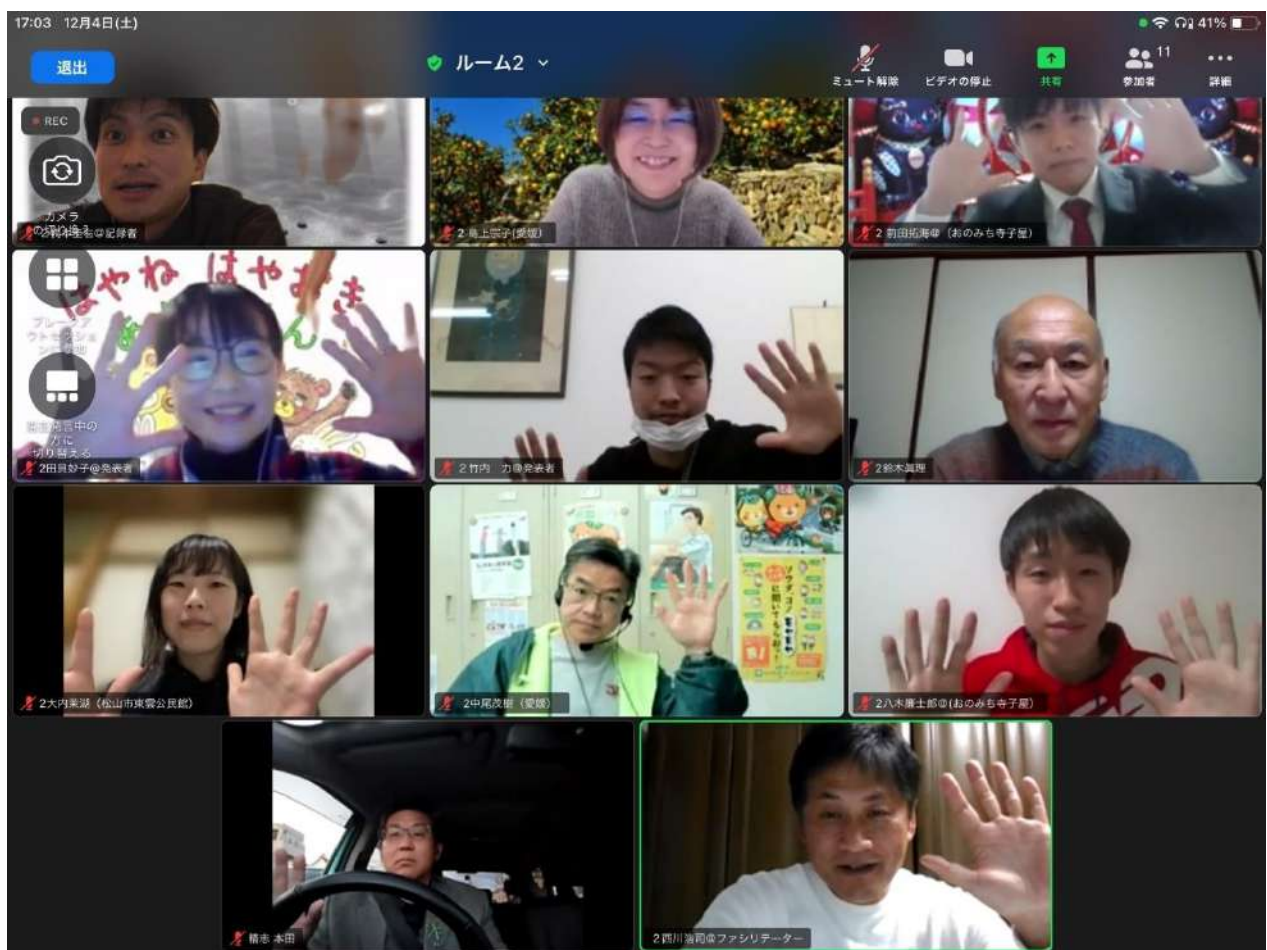
がやりたいことをやってもらうように呼び掛ける。そこからさらに紹介してもらえるようにする。来てもらえた方にどんどんアンケートを取っている。

感 公民館のイメージは「みんなのもの」借りたいと思ったときに借りれなかった（制限がある）ときはびっくりした。今されていることをぜひ貫いて頑張してほしい。

感 そういった弊害も今後課題としていきたい。

感 みんなが「楽しそうだな」と思える場所を作ることがすごく大切だと思う。今、わらで動物を作ったりしている。

感 どの活動も楽しさがあるが、達成感があるから魅力あるんだなと感じた。楽しさって何で生まれるのかと考えたときに、人としての関わりだったのかなと感じた。対面できない状況だが、人としての関わりを大切にしていきたい。



分散会3

ファシリテーター 高橋 涼
川田 健介
分散会記録者 稲田めぐみ

第19回おのみち100挑戦隊『感動創造の旅』

NPOおのみち寺子屋 発表者 西川 峻・奥野 愛絵

NPOおのみち寺子屋では、具多的な活動として、「おのみち100km 徒歩の旅」、「研修」、「ふるさと魅力発信隊」、「寺子屋おのみち」を行っている。

今年は、コロナ禍が続き、例年実施している「おのみち100km 徒歩の旅」（小学生たちと8月に4泊5日をかけて尾道市内の100kmを歩き抜く）の実施が難しかった。そこで、保護者の要望も取り入れながら、新しい取組「おの100挑戦隊『感動創造の旅』」を計画した。小学生が3会場で夏休みの宿題や学校の課題を自由に行い、分からないところを学生リーダーがサポートする“学びの機会”を4日間と、尾道市内のコース約20kmを歩き抜く“体験の機会”を1日間、合わせて5日間の活動を8月に2回実施し、合計42.195kmを歩き抜くようにした。しかし、本番直前にコロナの影響により規模を縮小することになった。そのため、“学びの機会”の4日間のみ開催となったが、チーム一丸となって前向きに取り組むことで、子どもたちにとっても、学生スタッフにとっても充実した学びの多い活動となった。

また、従来取り組んでいる「寺子屋おのみち」（学習支援）の活動を、オンラインを使って日常の中に学習を取り入れる工夫など、新たな取組へも挑戦している。



コロナ禍におけるオンラインでの読み聞かせプロジェクト

ことばの会 発表者 松本 葵

10年前から「おはなしウーフ」（東温市 お話し会）に所属し、図書館や保育園のお話し会に携わっている。今年3月、視覚障がい者の読書について情報交換をするオンラインイベントで、次のことを発信した。

- ・ 視覚に障がいがあることから、同じように視覚障がいのあるストーリーテラーを増やしたい。
 - ・ 視覚障がい者は、絵本に点字を貼ることで読むことができ、インターネット検索により、容易に絵本の情報を調べられる。
 - ・ 絵本の文字を点字にすることや絵の情報説明は目が見えている人に協力してもらう必要がある。
- このイベントでストーリーテリングに関心のある視覚障が



いの仲間に出会い、ともに企画しプロセスを積み、定期的にオンラインでのお話し会を開催している。

「オンラインおはなし会」は、自分たちが「おはなし」を楽しむことをコンセプトとし、打合せはZoomやFaceTimeで行っている。「人の手を借りなくてよい」、「打合せから企画まで自力で行える」、「障がいの有無に関係なくおはなしを語る活動を多くの人に伝えられる」というメリットもあるが、「絵本や大きな紙芝居は使えない」、「直接的なコミュニケーションが取れない」といったデメリットもある。

発表では、手遊び歌と、「てんとうむしさんのおでかけ」という詩を実演され、参加者はみんな自然と笑顔になっていた。実際の活動でも、親子のコミュニケーションが生まれ、楽しい雰囲気にも包まれている。活動を通して、いろいろな人と双方向に関わっていくことの大切さを実感し、子どもと関わることで社会と接点を持ち、社会貢献していきたいという思いを持たれていた。



<質疑応答>

<第19回おのみち100挑戦隊『感動創造の旅』>

Q 乗り越えることができた課題、乗り越えることが難しかった課題は？

A 乗り越えられなかった壁は、活動のメインとなる宿泊や食事を伴う活動ができなかったこと。しかし、新たな取組はできた。逆に、オンラインを使わないといけないものをうまく活用し、コロナにも対応できたのではと思う。

Q コロナ禍の中、学生のメンバーを広げていく上で課題はなかったか？

A 今、直面している課題である。大学のキャンパスで会うことができず、チラシを配れず、知ってもらえない。そこで、SNSを積極的に使っている。以前はしたことはなかったが、できることから新しく活動しているところである。

感 中学校で読み聞かせの活動をしている。PTAで活動していたが、コロナ禍でなかなか繋がれなくなった。今までは行事で繋がっていた。会員が減ってきていることが課題である。

感 どうやって信頼してもらえかが大切である。Zoomなどを活用し、知ってもらう努力が必要だと思う。

Q コロナ渦で活動を続けることの難しさを感じている。休校、オンライン授業……コロナ渦において、子どもたちの学力について変化はあるか？

A 学力の変化は、分からない。しかし、人と関わるのが希薄化し、うまく関われない子（低学年の児童）がいる。

感 お二人の笑顔が本当に素敵。人材確保と言われていたが、二人の人柄が伝われば広がっていけると思う。

Q 寺子屋おのみちの学習支援は、もともとはどういった子を対象にしていたのか？対象の範囲は？今後の活動の計画などは？

A 寺子屋の対象範囲は、尾道市内の小中学生。ご縁があれば市外の方の参加もある。今後は、おのみち100kmを何としてもやりたい。また、ハイブリット寺子屋をどんどん広げていきたい。12月1日から始めているが、子どもの数はまだまだ少ないので活動の輪を広げていきたい。

感 一人一台のタブレット時代。それをうまく活用し、尾道市内の児童にこの活動が広がっていったらいいと思う。コロナに負けずに頑張ってもらいたい。

Q おのみち100km旅の参加者は、どのくらいいるのか？何人くらいでやりたいのか？

A 子ども100名を受け入れている。学生スタッフが60~70名。一列に並ぶと長い距離になる。地域にも根

付いている活動。学生スタッフの人数が減っているので、100名の子どもを受け入れられるように、体制を整えているところである。

Q 関東の方では、NPO法人に入らず、ボランティア団体に入る学生が多いが、NPO法人のいいところは？

A ボランティア団体の方が尾道も多い。公共機関の後援をいただいているので、子どもたちに生かすことができる。

<コロナ禍におけるオンラインでの読み聞かせプロジェクト>

Q オンラインのお話会で、参加者を見つけることの難しさは？

A 1人に声を掛けると、その方が周りに声を掛けていただいている。オンラインだからこそできることや、いろいろな地域の方に参加してもらっている部分もある。今後、広報活動もしっかりとしていきたい。

Q 自分は発表や話すことに苦手意識があるが、松本さんの話し方はとても聞きやすい。何か工夫されていることはあるか？

A 人と話すことが好きで、早口になってしまうことがある。ゆっくりと丁寧に話すように言われ気を付けている。いつも楽しく聞いてもらえる雰囲気づくりを考えている。言葉のコミュニケーションを大切にしている、緊張はするけど、苦手意識はない。私は周りと同じにはできないことがあるけど、話すことはできる。司会であれば、助けを借りずにやれる。だから、進んでやってきた。回数を重ねていけば、だんだんと話すことには慣れていくと思う。

感 読書活動や読書活動ボランティアの交流会を実施しているが、コロナ渦の中で交流が難しい。高齢の方は、オンラインにも抵抗がある。オンラインのお話会に参加して、離れていても伝える気持ちがあれば、同じ時間を楽しむことができることを感じる事ができた。高齢者の方にもこういう機会を持ってもらい、自分でもできるとしてもらいたい。

Q 発表の中で、1歳の子からの答え…と、やりとりがあったが、お話の時間と交流の時間を、どうやっているのか。

A お話をしてから、交流の時間を設けているが、いろいろなやり方があり、両方が散財してしまったことがある。お話のコーナーと、雑談のコーナーに分けた方がいいのでは…と意見をもらったこともある。今後は工夫して実践していきたい。

Q 松本さんが思う、お話を語る楽しさは何か？

A 子どもたちと関わること。子どもたちから笑い声が聞こえ、絵を見て感想を言ってくれれば、繋がっているなと感じることができ、おもしろいと感じている。

Q 手遊び歌がとても楽しく、イメージが広がった。私が学校現場に戻ったら、ぜひ子どもたちにやってもらいたい。オンラインでの活動を、今後どのように広げていこうと考えているか？

A 今は、2人で活動している。自分と同じ障がいを持った方でも、もっと社会体験して行ってほしい。お話が好きであれば誰でもできる。やりたいと思う人と一緒に、対面も取り入れ、オンラインも続けていきたい。

A マッサージ師以外の仕事もしたいと思っている。子どもたちと関わる仕事を諦めているわけではない。できることから、子どもに関わることを何かしていきたい。

<全体を通しての意見感想等>

○ 100キロ徒歩が素晴らしい。自分の地元では難しいが、経験してみたい。ハイブリットの活動は、時代に合っていていいと思った。「♪えんどう豆」の手遊び歌を近くの子どもたちとやりたい。

○ 文化センターでボランティアをしていたが、コロナ禍で何かできないかと考えていた。コロナによって

マイナスな部分をいかにプラスに変えていくか、実践しているところがすごい。視覚に障がいがある方と関わるのが初めてで、これからどんどん関わっていきたいと思った。

- おのみち寺子屋の 100 km 徒歩の活動は、尾道を代表する風物詩になっていると思う。大学生が計画・企画しているところがすごく素敵な実践であり、これからも続けてほしい。松本さんとの出会いで、視覚障がい者の方への見方や考え方が変わった。
- 素敵な言葉や温かい気持ちがいっぱい飛び交う会だと感じた。学校現場も、コロナの影響で保護者や地域との関係が希薄化している面も感じることもあるが、思いがあれば伝わるということを、松本さんから教えてもらった。
- 社会には、こんなにもたくさん素晴らしい活動をされている方がいるのだと、いつもこの会で知る。今回もである。もっともっといろいろな人にこの会のことを知ってもらいたい。
- 温かい雰囲気での発表ができた。松本さんの発表から、新たな考えや知識に触れることができた。
- 私自身も勉強になった。おのみち寺子屋の活動は、大切な活動だと思う。これからも続けてほしい。自分が今の活動や今日の発表ができたのは、いろいろな方の支えがあったからこそ。活動にも制限があり、就職も難しいが、周りの方のほんの一言があるだけで生きやすくなる。そのことを知ってもらいたい。
- とても話しやすい雰囲気で場が和み、参加しやすかった。多様性や多様な関わりが言われているが、今回の会でいろいろな繋がりができ、参加してよかった。おのみち 100 km にも、ハイブリットの取組を入れてもらい、西川さんの実況やウェブ配信で、参加できない子も見て参加できるイベントにできたらさらにいいと思う。
- オンラインというツールを使って、子どもたちにお話を伝えようとする姿勢や思いが伝った。
- 発表者から大きなエネルギーをもらった。できないことに目を向けるのではなく、できることに目を向ける。できないことをエネルギーに変えて、やっていくことがすごい。コロナ渦で大切なこと。地元の区でも取り組んでいきたい。松本さん、横浜市でもお話していただきたい。
- 参加してよかった。松本さんが刺激的でした。松本さんの声がとても素敵で滑舌もいい。語りが心に入ってくる。中学校に読み聞かせに行っていて、給食の時間は黙食なので放送で読み聞かせをしている。松本さんもそういう活動があれば、広げられたらいいなと思う。子どもたちに素敵な物語を繋げたいと思って活動しているが、回りまわって自分の生きる力になっている。Well-being そのもの。自分自身を励ましてくれている。そのことを、子どもたちや皆さんに伝えたい。



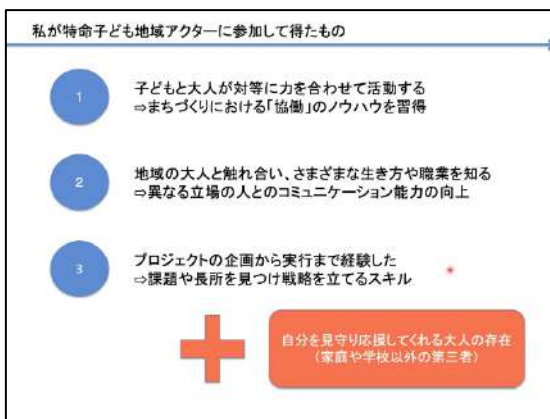
分散会 4

ファシリテーター 岡田 誠
分散会記録者 松本 拓海

認定 NPO 法人ミニシティ・プラス

認定 NPO 法人ミニシティ・プラス 発表者 橋本 みなみ

認定 NPO 法人ミニシティ・プラスでは、「まちはそこに暮らす人、かかわる人たちが創り上げていく」という理念で、まちの中で暮らす人が「まちについて知り」「まちのことを想い」「まちにかかわる」ために有効な事業をしている。その中で、特に未来を担う子どもたちが、自由な発想で社会について知り、体験し、考えるチャンスをつくり、その中で自分らしさが生かせる生き方を自分の力で見つけられるように促している。仮想のまちづくりでまちを考える「ミニヨコハマシティ」、実際のまち取材し情報発信する「つづきジュニア編集局」、大人のまちづくりの現場に中高生が参画する「特命子ども地域アクター Project」の3つの事業を行っている。今回は、「特命子ども地域アクター Project」を中心に紹介があった。これは、子どもたちをまちづくりの現場に特命で派遣し、子どものアイデアや機動力を活かしてまちの課題の解決やにぎわいづくりに、大人と一緒に取り組む事業である。まちづくりに意欲があり、神奈川県のようなまちづくりの場所に参加できる小学校5年生から高校3年生が対象である。この事業の中で、子どもたちは、自分事として地域で活躍したいと思うようになる。また、子どもと一緒に活動することで地域が生き生きと変化していくようになる。そして、子どもと大人がつながることで、まちが活性化している。発表者は、この事業に子どもの時に参加しており、現在はサポートをする立場として、活動に取り組んでいる。



松野町地域おこし協力隊

松野町地域おこし協力隊 発表者 六車 浩二

松野町で、小中学校への ICT 学習推進・学習指導、地域住民への ICT 普及啓発、情報発信方法の再構築などの取組をしている。小中学校への出前授業など地域教育を展開しながら IoT で地域の課題解決を目指す「まつの IoT ラボ」の活動をしている。松野町の史跡「河後森城跡」山城学出前授業では、AR、VR などを使った授業、クラブ活動では、



micro:bit を使った電子工作・プログラミング活動をしている。他にも、「松野町どこでもだれでもIoT」地域おこしプロジェクトでは、地域の人たちが困っていることを聞き、IoT を使って問題を解決している。さらには、農作業の負荷軽減ため、愛媛大学農学部と連携し農業用ロボットの開発を行っている。



<質疑応答>

<認定 NPO 法人ミニシティ・プラス>

- Q 参加する子どもたちはどのように募集しているか。
- A 活動は主に3つあるが、1つ目の活動（ミニヨコハマシティ）をした人が、2つ目、3つ目の活動と継続することが多い。ジュニア編集局が作成した新聞の募集欄を見て、参加する子もいる。
- Q 障がいのある子どもたちは参加しているか。
- A 毎年ではないが、障がいのある子どもも参加している。
- Q 特命子ども地域アクターで橋本さんが実施した、電子紙芝居の話詳しく教えてほしい。
- A こどもへの環境啓発の「水育」イベントで写真家のとった写真から物語をイメージし、物語を作った。キャラクターも声を担当し、ステージにもたった。浦島八郎物語を作った。（追記：浦島太郎の先祖である浦島八郎が、竜宮城にいったら海が酷い汚れで困っていた。NPO をつくってお掃除する活動を八郎がはじめるというストーリー）
- Q 橋本さん自身は、どのようなきっかけでこの活動に参加したか。
- A 同じ団体の「ジュニア編集局」から活動を知った。大人の人に誘われて軽い気持ちで参加した。参加するとすごくおもしろかった。
- Q 県からの補助金がなくなってから、資金はどうしているか。
- A 補助金があった5年間で約 2000 万円かかっている。補助金がなくなってから、助成金を申請したり、賞に応募したりしている。参加したアクターには、交通費と弁当を支給しているの、このことは続けていきたい。
- Q 活動を支えるスタッフはいるか。
- A 音楽をしている人、大学教授、小学校の先生、子どものときに参加していた OB・OG など、いろいろな人がいる。年代も様々である。
- Q 小学校の先生が関わるようになったきっかけは。
- A こどものまち「ミニヨコハマシティ」の活動で市長選挙に出た子どもが大人になり、小学校の先生になっても、ずっと NPO に参加してくれている。また、子どもの保護者がスタッフとなる人もいる。
- Q まちづくりについて大人と子どもが議論しているとあったが、どんな議論をしているか。
- A 年度によって、話合いの内容は変わる。しかし、大人が上から目線になっていることが多い。対等な立場で話合いをするべきだと思う。毎回、大人と子どもの関係性は議論になる。大人と子どもが対等に話すためのノウハウを講座として開いている。

Q どんな講座をしているか。

A 大人と子どもでの会議の方法、子どもへの声掛けの例示などを伝える講座をしている。
こちらにYouTubeがあります。

<https://actor.minicity-plus.jp/2019/03/5590>

Q 子どもの意見はしっかり聞くという雰囲気か。

A 最初は、子どもに何ができるのかと思っている人たちも会議を重ねていき成功すると、大人たちの意識も変わった。一度でも成功すると、対等な関係になっている。しかし、中には、子どもを子どもとしてしか扱わない、上から目線の大人もいる。子どももまちづくりの一員なので、こどもと活動することで、大人にも新しい世界を体感してほしい。

Q 子どもたちは成長していますか。

A 継続して関わると子どもの成長を感じ、うれしいときがある。

<松野町地域おこし協力隊>

Q なぜ、大学院に行こうと思ったか。

A 仕事をしていたときは、いろいろなアイデアは出てくるが、それを実現することができなかった。実現したいと思いがあったから、大学院へ行くことにした。

Q 出前授業は、他のところでもされる予定はあるか。

A 自然エネルギー出前授業は、隣の鬼北町で行った。学校の教職員が使っているグループウェアを使って情報提供をしている。

Q 小中学校へのICT支援は、プログラミング以外にあるか。

A メインはプログラミング。教員側のリクエストに応じて何でもする。電子工作の面で支援をしている。

Q 学校では、総合的な学習の時間の学習として授業を行っているのか。

A 教科の学習では、あまり行っていない。総合的な学習で行っていることがある。基本的には、クラブ活動で行っている。

Q 中学校にも行くことはあるか。

中学校から需要はあまりない。ロボットコンテストをしたい気持ちがある。リクエストを待っている。

Q 地域おこし協力隊には、任期があるが任期後はどうされるのか。

地域おこし協力隊は、私の年代の人はほとんどいない。地域おこし協力隊以外にも総務省の集落支援員というのがある。そちらは、年代が上の人の方が多いため、そちらも考えている。

<情報交換・感想など>

<岡山県の事例>

コミュニティ・スクールで地域学校協働活動推進委員を設置している。子どもたちが地域に出て活動しているところもある。過疎地は、地域おこし協力隊ががんばっている。子どもたちが夢や目標を持つための活動をしている。学校だけでなく、家庭や地域とも協力して進めていっている。社会教育団体などにも協力をお願いしている。地域の実情によって、連携の仕方は模索している。

<松野町の事例>

授業で地域の人が入るということはあまりない。学童保育は、地域の人が先生をしている。GIGA スクール構想で1人1台端末になったが、学校や教育委員会は、セキュリティが重要視されている面もありうまくいかなかったことがあった。高齢者向けにアンドロイド端末にデータ移行のお手伝いなどを行っている。そのような形で地域と関わっている。

感 子どもから参加して。大人になっても続けているのがよいと思った。

感 子どもたちや地域のためにいろいろなことをしているのがよいと思った。学校で先生との関わりだけでは、いろいろな価値観に触れるのは難しい。その中で夢や目標を持つのは狭まってしまう。だから、地域の人と関わっていくのがよいと感じた。



分散会5

ファシリテーター 田中 行
分散会記録者 村上 諒

ふるさとキャリア教育！地域ブランドの「ひまわり」を活用した 地域活性化～ALL for CHILDREN すべては未来を担う子どもたちのために～

釈迦内サンフラワープロジェクト実行委員会 発表者 三浦 栄一

学校におけるキャリア教育推進と地域の活性化を目的とし、地域でプロジェクト実行委員会を設立して「向陽（ひまわり）」を活用した活動を行っている。大館市は消滅可能性都市と言われ、人口減少が深刻な問題となっている。そのような中で、ふるさとに生きる基盤を培う「ふるさと教育」と、その基盤の上に自らの人生の指針を描く「キャリア教育」を融合した「ふるさとキャリア教育」という未来戦略を掲げ、活動を行っている。コンセプトは「大館市全体を教室に、市民一人一人が先生に」である。

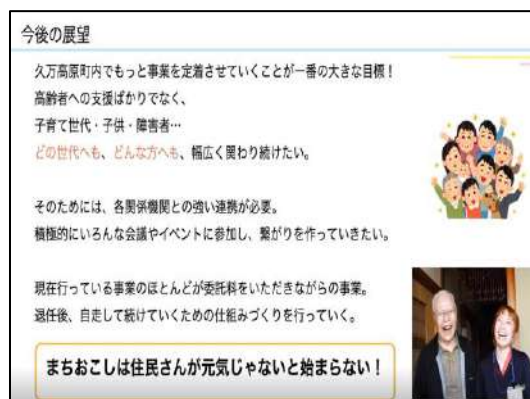


具体的には、ひまわりの栽培から収穫・商品化・販売までを行う実践的なキャリア教育による6次産業化を実現し、子どもたちが主体となって呼びかける「一戸一ひまわり運動」を展開している。これらの活動を通して、「課題解決力」「状況把握力」「傾聴力」「柔軟力」等の力が養われている。何よりも大切にしているのは「顔の見えるおつきあい」。ふるさとキャリア教育を通して大館市釈迦内でつくられた「ひまわり油」の主成分は「希望と未来」なのである。

地域住民がいきいき暮らせるまちづくり

久万高原町地域おこし協力隊 発表者 酒井 春菜

コミュニティナースは「コミュニティナーシング（地域看護）」をもとに、住民さんの身近な存在として「毎日の嬉しいや楽しい」を一緒に作り、「心と身体の健康と安心」の実現を目指している。久万高原町は高齢化率約47%と非常に高齢者が多く、山間地区の集落が分散していて公共交通機関が行き届いていない地域医療の課題が多い町である。コミュニティナースでありながらも地域おこし協力隊に所属している利点を生かし、「住民が元気でなければ町おこしは始まらない」「健康と生きがいをづくりをしていこう」と考え、活動を進めている。



る。活動内容は、中間支援組織「ゆりラボ」がある施設で保健室を開催する「コミナス保健室（まちの保健室）」の開催、訪問型お元気応援サービス「ナスくる」、耕作放棄地を有効活用して食のありがたみを知る「くまっこ食堂」、その他、様々な協働事業などがある。今後の展望として、久万高原町内で事業を定着させ、高齢者の支援ばかりではなく、どの世代へも、どんな方へも幅広く関わっていきたくて考えている。

<質疑応答>

<ふるさとキャリア教育！地域ブランドの「ひまわり」を活用した地域活性化～ALL for CHILDREN すべては未来を担う子どもたちのために～>

感 見ていて、聞いていて楽しい。実践を聞いているとなかなか実践できないようなものが多い中で、この活動はなにかできそうな気がする。無理がない。

感 「儲かる地域活動」はこれからのキーワードになる。

Q 地域学校協働活動、コミュニティ・スクールの一体的推進という点で悩んでいる。釈迦内地区は地域学校協働活動、コミュニティ・スクールとしてこの取組を進めているのか。

A 大館市にはコミュニティ・スクールが1校しかない。ただ、当たり前のように地域学校協働活動を行い、「ふるさとキャリア教育」として活動に取り組んでいる。

Q 高校生になると町に高校がないので高校生の姿がなかなか見られなくなる。ひまわりの活動を経験した子どもたちは中学生や高校生となり、どのように関わっているか。

A ひまわり活動は中学校と連携している。また、大館市には子どもハローワークというものがあり、どこかの事業所の取組にいつでも参加できる。ひまわりの種採りを行う場合、子どもハローワークで募集をかけると高校生などが活動に参加してくれる。

感 中学生や高校生を地域の活動に参加させるというのは難しい。そういう点で子どもハローワークの取組みはとてもよいと思った。小さい頃の経験がどこかに残っていて、大人になっても自分の町に魅力を持つことができれば地域の人口減少が大きくならなくて済むのではないか。

Q 10年間どのような思いで継続して活動を続けているのか。

A 消滅可能性都市と言われるこの町をどうすればよいかという気持ちが根っこにある。ふるさとのおもしろさだけ学べば良いというわけではないし、職業観だけ学んでもいけない。だからこそ、それらが一体となった活動はどうすればよいのか考えた。学びというのは全てがつながって今の自分をつくっている。コロナの影響でひまわり活動の一環である対面販売ができない中で子どもたちがクラウドファンディングを思いついた。「なければ作る」という考えが大切。

感 1つのコンセプトに統一しているからこそ大きなプロジェクトになる。

<地域住民がいきいき暮らせるまちづくり>

感 地域おこし協力隊と聞くと農業のイメージが強いが、農業関係ではなく医療の分野からの地域おこしというのがおもしろい。色々考える前にまずは実践していることで広がりが見られると感じた。

Q 町の保健士との違いや連携している部分を知りたい。

A 看護師資格を持った人がコミュニティナースであり、ほとんどやっていることは一緒だが保健士は制度の中で動いている。(訪問など) コミュニティナースは制限なく行動できる。

Q コミュニティナースは看護師以外でどのような方がされているか。

A ガス屋、理学療法士、ヨガのインストラクターの方などがされている。

Q コミュニティナースは自分が名乗ったらなれるのか。

A 難しいところ。今定義が決められている。一応コミュニティナースの研修はある。研修を受けている人と受けずに名乗っている人の両方がいる。ただ研修を受けた人は活動する際に自負があるので、研修を受けていない人も受ける傾向がある。

Q 男性のコミュニティナースもいるのか。

A いる。理学療法士や医者の方が多い。老若男女関係なくコミュニティナースをやっている。

Q 行政だと個人情報の扱いが難しい。民生委員すら情報提供が難しい中で知り得た情報の共有度

合いはどうなっているか。

A 今、問題になっている。様々な機関と連携している中で、どこまで情報を共有していいのかははっきりしていないのが現状。今話し合っていて明確にしている最中。

Q 久万高原町が好きという気持ちが伝わって来る。地域のことを好きな子どもを育てたい、地域に帰ってくる子を育てたい。どうしてそこまで久万高原町のことを好きで働いているのか。

A 別の市にいたときに辛い経験をした。そのような中で久万高原町に引っ越し、そこで出会った友達が優しかった。イベントに対してみんなが協力する姿なども見て「久万が好き」と心から思ったから久万高原町に戻った。これからも久万高原町に戻りたいと思ったら戻れる住環境を整えていきたい。

〈全体交流〉 質問

Q 尾道寺子屋はどのような活動をされているのか。

A 尾道寺子屋は主な活動として夏に100キロウォークを行っている。活動を通して子どもたちが地域を愛する気持ちを高めたり、大学生の力も伸ばしたりすることを目的としている。子どもの学習支援も行っている。

Q 尾道寺子屋はいろんな学校の学生がいるのか。

A 広島県内、様々な学校の人がいる。

Q 尾道寺子屋の学生さんの地元との関わりや、地元を離れてどう思うか教えて欲しい。

A 高校から愛媛に来たから地域の方との関わりはそこまで多くなかったが、見守りの方から声を掛けてもらうことがあった。それが嬉しかった。愛媛の人は温かい。愛媛にいるときは「県外に出たい」と思っていたが、色々な場所に行ってみた「愛媛っていいな」と思うようになった。

A 佐賀県の田舎出身。将来は小学校の先生になりたい。勉強を教えるだけではなく、地域に対する愛を育てていきたい。

A 教育を学ぶことで、「教育って奥が深い」と思うようになった。来年留学できたらしたい。留学から戻って来たら広島か愛媛で教員がしたい。

〈全体交流〉 意見・感想

感 どちらの実践も地域と寄り添うことを大切にしている。地域の温かさを感じるのは簡単そうで簡単ではないと思う。自分もそのような地域で過ごしていきたい。

感 地元への貢献の仕方はそこに戻るだけが答えではない。現代の世の中を考えれば地元から遠くても様々な形で地元へ貢献することができる。だからこそ「地元へ貢献したい」と思える子どもを育てることが大切。

感 田舎に帰って来て欲しいという思いはあるが、仕事や住む場所の環境が整っていないのが現状である。環境整備を田舎に求めるだけではなく、別の形で田舎へ貢献する方法も一つの手段としてあると思う。

感 活動する人たちは自分自身が活動を楽しんでいる。その気持ちが大切。

感 貴重なお話が聞けてよかった。今、自分もなかなか地域へ貢献する活動はできていないが、将来、我が子が幸せに暮らせる地域をつくりたい。みなさんがやっている取組の一つでも取り入れたいと強く思った。

感 シンボルができると強い。



分散会 6

ファシリテーター 佐々木一光
分散会記録者 西村 隆信

益田市教育委員会 協働のひとづくり推進課

発表者 島根県益田市教育委員会 協働ひとづくり推進監 大畑 伸幸

行政の課題としてあげられるのは、縦割り、協働、丸投げ、丸抱えである。課が分かれ縦割りになっており、協働での仕事がやりにくい。そのため、仕事を丸抱えにしていたり、丸投げしたりすることが多くなる。また、研修、研究は得意のだが、修養が足りないと感じており、特に、若者達に修養させる必要があると考えた。それを解決するために、マルシェ方式で取り組むことにした。

最初のマルシェは、益田市で行われる雪舟サミットを見据えて、雪舟の郷記念館で実施した。責任者は、「初代協働の達人 麻生君」。マルシェでは、何をしてもよいというルールで行い、終了後に課題をシェアし、次回に繋げた。市民が参加するためには、市民と一緒に考えていくというスタンスで取り組んだ結果、雪舟サミットも大成功だった。次に取り組んだのは、「2代目協働の達人 健人君」による図書館を盛り上げるためのマルシェ。図書館という概念にとらわれないことなく、キャンプをしたり、花を植えたり、お店を出したり、色紙を使用して巨大なアート作品を作ったり、市民と一緒に取り組んだ。これらのマルシェは現在でも継続して月1回程度開催している。

その他にも、「3代&4代&5代目協働の達人 俊彦君、真君、咲季さん」によるプロジェクトでは、益田のご当地アイドル「Precious (プレシャス)」を作って盛り上げたり、市民と一緒にミュージカルを行ったりしている。

全ての活動は、行政がお世話するのではなく、市民と一緒に作ることに徹している。音楽が得意な人は音楽を、アートが得意な人はアートを。市職員自身がこの町で生きることを楽しみながら、市民として市民と一緒に生活することで、丸抱え丸投げの行政から市民として市民と一緒に生活する市役所職員に成長している。



The ZEN 如法寺もりあげ隊

発表者 The ZEN 如法寺もりあげ隊 西山 友恵

この組織は、えひめいやしの南予博の際に誕生した。お寺と地域をつなげて子育てをしたいという思いで、350年の歴史がある如法寺で座禅のイベントからスタートした。現在では、子どものためのイベントに限らず、大人のイベントも開催している。地域に誇れる文化遺産を活用することで、お寺を中心に人と人のつながりができていると感じている。

活動内容は、如法寺夏祭り、如法寺秋のお泊り会、仏像講座、呼吸法講座、漢詩講座、レトルトカレー寺等、多種多様であり、檀家さんと話し合っただけで活動内容を決定することもある。面白かったものもあれば、不人気なものもあったが、お寺を会場とすることで、様々な方があつまり、様々な話し合いができている。また、イベントの規模（人数）を成功として考えないことが、えひめいやしの南予博以来継続できている秘訣ではないかと考える。

この数年間は、コロナの影響でお寺を使用することが難しいが、外で芝生の上で座禅体験をする等、「今できることをできるだけ 楽しめる範囲で」をモットーに活動をしている。

人生100年時代に、豊かに生きるためには、生き方や働き方をどうしたいのか考える必要がある。自分の幸せとは何なのか、より豊かな人生にするにはどうすべきなのか、そういった思いを持ち、皆で豊かに生きるためにボランティア活動を続けている。



<質疑応答>

<益田市教育委員会 協働のひとづくり推進課>

Q 組織作り、人を育てる秘訣は何か。

A 市職員（若者）は課題からスタートするが、楽しいことからスタートすること、やってみたくことから始めることが大切。「いいね」、「だいじょうぶ」この二言で子どもたちは動く。活動後に物語を語れるようにすると、次から物語を考えてくる。

Q 活動に興味がある人となない人がいると思うが、どういうスタンスで関わっているのか。

A 17人の職場なので、小学生のモチベーションを上げる事と同じである。日本人は同調圧力を感じ

じるため、みんながするとやる。仕事ではないが、楽しいことをしようと取り組んでいる。若いうちに教育を行えば、変わることができる。

Q 大畑さんはすごくポジティブだと感じる。大変だったことってありますか。

A 起きたことと感情とを別に考えている。失敗したら、小さいことを早くやってみる。失敗しても次は失敗しない方策が見つかったと思ってやるようにしている。感情的にならないことが大切だと思う。

Q 社会教育の意味が分からないとか、なんでやるのって思う人が多いが、そういった人に対してどのように接するのか。

A ボランティアには、お金を出さず、足を引っ張らない、活動をする、活動を支えてくれる家族がいる、いろいろな意味があると考えている。活動に取り組むだけではないと考える。

Q 子ども向けのイベントを企画しているのだが、こういった広報活動をしているのか。

A 最初は、保育園に「これに色を塗ってきたら缶バッチ」という広告を持参している。継続することで人が集まるが、最初の呼び水が小さい子。小さい子がくれば親も来る。あとは継続すること。

Q 今後、どのような活動にチャレンジしてみたいか。

A 中学生が地域活動をたくさんしているので、そこに市職員がもっと関われば良いと思っている。都会と違って買えるものは少ないが、何でも作ることができる。トライし続ける若者に期待している。中学生は公民館に行って相談するが、高校生は公民館に行かない。だから、I ターンの方 13 人が相談相手となってもらえるような場所を作った。

<The ZEN 如法寺もりあげ隊>

Q 図書館で活動をすると、静かになるというように、場所による力を感じるのだが、お寺の力って感じたことはあるか。

A お寺って広いので、子供たちが走りまわるのだが、全然、先生の言うことを聞かないような子でも話を聞くことができる。

Q レトルトカレー寺とはどんなイベントなのか。

A 全国のお寺をつないでカレーを食べるという活動ではあるが、何をしてもよい活動で、音楽をしてもいい。現在は如法寺では実施していない。檀家さんとのつながりがあるので、たくさんのかたの意見を尊重する必要がある。現在、コロナ禍でお寺が使えないが、逆にいろいろな活動ができています。

Q 檀家ではなく、サポーターを作っていく必要があるということですか。

A 継続することで檀家さんも認めてくれるようになってきた。つながればよい。

Q 素晴らしい活動。是非、広く周知していただけないでしょうか。

A 周知、広報が十分にできているわけではない。特にコロナ禍なので難しい状態である。愛南町からの校長会から参加したいとの交渉があった。が、今、住職、檀家さんと検討中である。

<全体を通しての意見感想等>

○ やりたいことを形にするってことがとても素敵。これって思うよりも身近にないように思う。もっとあれば楽しいと思う。

○ 部下を引っ張っていくということに関して共感した。30、40代になるにつれて、考えが固まっ

てくる。「若いうちに」という箇所がとても共感した。

- これからは人材育成が課題。現在、人材育成は学校しかない。しかし、学校は忙しくて難しい。だから、現在、社会教育で市民の中で人材を育てている。人を育てるためには、自分が楽しみながら挑戦していくことが必要だと思う。それがロールモデルとなり、若手が育つと考える。
- 自分自身がロールモデルになるっていう言葉がとても心に残った。教師も生徒にその姿を見せていきたい。
- お寺に行くことってなかなかない。今治市のお寺で年1に合宿をするのだが、非日常がとても素晴らしい。お寺での活動はきっとみんなそのように感じているのではないか。
- お寺と檀家の関係は学校だと学校と保護者との関係。お寺ともりあげ隊との関係は学校と地域との関係だと考える。学校現場において、学校を盛り上げてくれる地域とどのようにかかわれるのか。地域で学ぶ機会をたくさん設けられる社会を作っていければと思う。
- 大学生がたくさんこういった会に参加しているが、こんな大人がたくさんいることを知ってもらえるいい機会になった。
- 中高一貫に通っていて、地域との接点がありませんでした。今日の会で、社会教育の一端を感じることができた。
- 輝いている人をねたむ人がいる。最後は突き抜けるしかない。田舎は、「しょうがねえな」と思わせることが大切だと思う。おまえが言うならしょうがねえなあ、やろうかと思う義理人情がある。
- 大人になってからはなかなか変わらない。子どもの頃から様々な活動をしていくことが大切だと感じた。
- 学校の先生には、児童生徒への後押しをしてもらいたい。それだけでよい。その地域へ出てくる必要はない。先生の地元へ出ることが大事だと考える。
- 学校の果たす役割はとても大切だと感じた。今日参加させてもらって、楽しんでやること、批判されても何のためにしているのかという信念をもつこと、そういった姿勢を忘れずに教育に関わっていきたい。
- 地域が学校を助けてくれることが多かった。先生は地域が頑張るとそれに併せて頑張ろうとする。もっと、地域に甘えることが必要とも感じた。



分散会7

ファシリテーター 土手 康之
分散会記録者 菅原 恵

おやじ達の地域活動から生まれたコミュニティ・スクール

栗林おやじ塾 発表者 早谷川 悟 氏

栗林おやじ塾は、地域の子どものための活動支援と地域の活性化を目的に平成12年に結成された。野外活動・体験活動など学校ではできにくいことを中心に行っている。父親が活躍できる場を取り入れて、おやじの地域デビューのきっかけもついている。

活動方針として、「まずは、自分達が楽しむ！」を大切にしている。具体的な活動としては、1 Night キャンプ（段ボールを使った活動や野外映画）、学校行事の支援（高松まつりの参加）、冒険塾（峰山ウォークなど）、子どもたちの発表の場の設定（栗林オータムフェスティバルなど）、写真スポットパネルの作成、門松作り、子どもたちの居場所作り（プレーパークの運営）などがある。

地域活動において学校とのつながりが深くなり、学校教育への関わりを考えるようになったことで、高松市が全小中学校でコミュニティ・スクールを設置するにあたり、栗林地区がいち早く学校運営協議会を立ち上げ、高松型コミュニティ・スクールを発足した。そして、今年度、地域学校協働本部を立ち上げた。クラブ活動支援（パソコン、野外体験）、コミュニティ・スクールへの参画（校庭芝生のメンテナンス、学校ビオトープの整備）、夏休みラジオ体操会の開催などを実践し、地域を巻き込みながら活動している。

香川県では、「みんなで子どもを育てる県民運動」を展開している。地域での重要な役割の一つがコミュニティ・スクールである。地域と学校が一体となって子どもたちに積極的に関わり、子どもたちを育てていくことを確認して、これまで以上に地域が子育てに関わっていくことが重要だと考える。

活動方針

- ◇子ども達が輝き参加できる場面の提供
- ◇父親の地域活動へ参加のきっかけづくり
- ◇活気ある街『栗林』への熱い思い
- ◇地域の宝物『栗林公園』の活用
- ◇自分たちの街は自分達で盛り上げる
- ◇まちづくり=子育てを基本に子どもたちが生き
活きできるまちをつくる
- ◇無理をせず、できる人ができる範囲で活動する

まずは、自分達が楽しむ！

1 Night キャンプ in 栗林小



学校が核となった地域創生ネットワークシステムの構築

愛媛県立土居高等学校情報科学部

発表者 徳永 俊一 氏(教員) 佐伯 祐哉 氏(前部長) 立川 光希 氏(現部長)

土居高校情報科学部の実践は、「はじまりの時期」「形成の時期」「維持・拡大の時期」「変容の時期」に分けられる。

「はじまりの時期」では、ビジネスの基礎的な知識・技能の習得と、紙の町日本一をPRする活動を行った。「形成の時期」では、「観光甲子園」で全国優勝したり、日本初となる高校生企画主導の広域連携型インバウンド盆栽ツアーを実現したりした。「維持・拡大の時期」では、「オンライン体験フェス」において、盆栽ツアープランをインターネットでライブ配信した。そして、これらの取組が地域創生の模範事例として、「第7回ディスカバー農山漁村の宝」に選定された。現在は「変容の時期」であり、選定・授与されたビジョンを実現する取組を行っている。これまで、パブリシティ戦略を用いて情報を発信することに力を入れ、様々なコンテストに応募し、たくさんの賞もいただいたが、今後は、世界遺産への登録を目指す取組を進めている。

実践事例からの考察としては、学校教育とビジネスを融合し、地域創生と環境保全を両輪とした持続可能な社会を実現するための新しいネットワークシステムの提案である。新しい学問分野を創出することが、新しい地域の可能性を創造し、最終的には持続可能な地域社会の実現につながると確信している。

最後に、高校生(現部長)と地域協力者(卒業生・前部長)の活動報告として、「今のこの活動を日本の未来につなげていきたい。」「むらの宝に選ばれた取組を多くの人に発信したい。」という声があった。

<質疑応答>

<おやじ達の地域活動から生まれたコミュニティ・スクール>

Q 「昔も今も子どもは変わっていないが、大人の見方が変わった。」とは、具体的にどういうことか。(北原)

A 昔は子どもが学校から帰ったら、ランドセルを放り投げて遊びに行っていた。それを大人も許していた。個人的な考えにはなるが、今は塾などがあるせいか、大人がそれを許さなくなっているように感じる。(早)

四国中央市版 次世代型地域創生ネットワークシステム

- 学校教育(高校生・教員・高校)と「地域住民経営組織(仮称)」を融合し、「地域創生」と「環境保全」を両輪として持続可能な地域社会を実現するための新しいネットワークシステム、ESDビジネスモデル、SDGs実践。
- 世界有数の観光立国スイスの「ブルガーゲマンデ」(地域経営組織)を参考にしている。(※国内の先進事例も含む)
- 高校生(教員)が核となり、学校教育と「地域住民経営組織」を統合した次世代型の地域創生の仕組み。



谷川)

感 私の地域では、学校でも地域でも、子どもたちが“おやじたち”ではなく、祖父母と一緒にする活動が多い。だから参考にしたい。(篠原)

感 働き盛りの人が、地域活動に参加することがなかなかできない現実がある。でも、参加できるようにしていきたい。(早谷川)

Q 子どもの時に参加した子が、指導者として参加したことはあったか。(上田)

A 大学生のプレリーダーとして参加した。(早谷川)

Q 香川県がおやじの会が盛んな理由はあるのか。(近藤)

A 昔から子育てサークルが盛んな県である。リーダー的な人も多く、子育てサークルと上手にジョイントすることで、おやじの会も活性化されている。また、教育委員会のバックアップもあり、行政とおやじの会が上手にコラボし、大きな影響を与えていると思う。(早谷川)

Q コロナ禍の中、活動を維持する方法を教えてください。(清水)

A キャンプや“逃走中”の代わりに、ズームでのオンラインバトルゲーム大会を行った。学校での宿泊学習ができなかった代わりに、星空観察を行った。今だからできることをした。(早谷川)

Q “逃走中”を行った経緯について教えてください。(土手)

A 子どもからのオファーでおやじの会が企画した。子どもからのオファーがうれしかった。自分達の地域に、素晴らしい公園があることを意識させることは大人の役目だと思う。素晴らしい公園のことをPRできる子どもが育つとよい。(早谷川)

<学校が核となった地域創生ネットワークシステムの構築>

Q 学校とビジネスの融合がすすじた。活動を始めるための準備を知りたい。(福井)

A 学校教育とビジネスの融合は、今の世界では難しい。実現を目指して試作をしている段階である。(徳永)

Q 子どもたちの変化について教えてください。(篠原)

A 未来を考えて行動に移すことの大切さを感じていた。小さな取組の積み重ねが世界を変えられている。(徳永)

Q 公教育とビジネスの融合の発信について教えてください。(近藤)

A 公教育とビジネスの融合は前例がない。だから、言葉に出してビジョンを語り、教育が地域創生の核になるように、いろいろなところで発表し、連携する人を増やしたい。(徳永)

感 最近、ミュージアムショップや図書館とカフェの併設等が当たり前になった。公民館でも地域の物産を売るようになるかもしれない。社会教育で学習成果を生かす方法を実現させたい。(近藤)

Q 前部長である佐伯さんは、地域協力者として今はどんな活動をしているのか。(土手)

A 最近では、文化祭と一緒に盆栽体操を踊った。コロナ禍で活動が少ないが、地域協力者が参加できる大会への参加や資料作成等をしていきたい。(佐伯)

Q コロナ禍の中、活動を維持する方法を教えてください。(清水)

A オンラインになることで、他県や世界、様々な人とつながり、何百倍も活動が広がった。人間は無限の可能性があり、その可能性を広げるのは教師だ。社会教育も含めた教育が様々な危機を救うと思う。(徳永)

Q 盆栽体操はどこで見ることができるのか。(土手)

A 「土居高校情報科学部」で検索すると、盆栽体操も含めた取組が見ることができる。(徳永)

<全体を通しての意見感想等>

- 発表で参考になることが多かった。“逃走中”や段ボールの活動はとても楽しそうなので、やってみたい。小学校での総合的な学習の時間を大切にしていきたい。(菅原)
- 教員を目指す自分にとって、学校の目指す形が見えた。地域で子どもを支える仕組みの大切が分かった。(福井)
- 自分たちが楽しみ、そして、できることを探していくことの大切さを感じた。(北原)
- おやじの会が22年も続けていることがすごい。続けることの難しさがあると思う。土居高校の良い連鎖も続けてほしい。(清水)
- おやじの会が22年も続けている理由は、楽しさや仲間のつながり、良い雰囲気だからだと思う。自分の地域で何かをしようとするときに、地域の協力者はやらされている感を持っている。おやじの会の取組は勉強になった。
徳永先生の話のあった“教育は世界を変える！”は、本当にそれだと思う。社会教育と学校教育が一緒になって取り組むと、今回のテーマでもある“ウェルビーイング”みんなが幸せな世の中になると思う。(上田)
- 今日は大変わくわくした。地域が関わることや教員のスキルを教えること、教育の目標などあるが、最後は社会教育も学校教育もパッションの問題なのかなと思った。(近藤)
- 皆さんの話を聞いて、活力をいただいた。机上の話だけでなく、実践することで活かされると思う。実践することの大切さを肝に銘じて、自分も発信していきたい。(篠原)
- このような機会をいただき感謝している。また、今後、土居高校と一緒にできることがあれば取り組んでみたい。(早谷川)
- このような場をいただき感謝している。地域協力者としての志や未来に対しての向き合い方を改めて感じる事ができた。(佐伯)
- このような場をいただき感謝している。今後もよろしくお願ひしたい。(徳永)



を輝かせることができる仲間がいることが最大の特徴でありいいところである。

「学ぶ」ことには制限がない。出会い=チャンスだと思っている。

コロナ禍でも子ども食堂がやれることは？と活動してきたこと。

特定非営利活動法人 U.grandmaJapan 発表者 松島陽子

平成30年7月豪雨災害を期に同級生5人で団体を設立し、生活再建から中間支援まで活動してきた。当初は、貧困世帯の支援や高齢者の孤独解消の視点からの活動が中心だった。そこから見えてきたことは、コミュニティや顔の見える関係を作ることの大切さだった。このため食を通じた関係づくりの視点から子ども食堂を立ち上げ、防災教育などを取り混ぜて開催するなど、支援の形を変えてきた。昨年からは、コロナ禍になり子ども食堂が開けないという新たな状況に向き合うことになった。地域のニーズや活動の制約の変化に応じて、今やれる支援の形を変えることを繰り返し、活動を変化させ、学校、行政、事業者、団体など多様な主体と連携し、それぞれがもつ強みを持ち寄り、弱みを補うことで、沢山の方に支援や広報ができた。

○ 取組の詳細

災害時、グランマに炊き出しのコーディネートが依頼された。たくさんの企業や市、NPO団体が力を合わせて、8月までに1万8千食のコーディネートをした。その後、物資支援、イベント・コミュニティサロンの支援、高齢者支援、生活再建のための支援、中間支援組織としての活動をした。災害支援を通して見えてきたことは、人とのつながりや地域のセーフネットが必要であること。



そのため、第三の居場所、つながる場所になるということで、子ども食堂を立ち上げた。当時、宇和島市内では、コミュニティの場所が少なく、子ども食堂や三世代が交流できる場も少なかった。そこで、つながりの輪で、ネットワークを作った。災害支援を行ったみなさんが子ども食堂を立ち上げ、14くらいの子どもの食堂が出来上がった。今では市、企業、子ども食堂、地域や県の方と子ども食堂連絡協議会を作っている。

子ども食堂は、地域食堂にもなっている。運営は、高校生、中学生が協力しながらやっている。コロナ禍までは、毎回やることを自分たちで決めて、手伝いをしてきていた。高校生は調理スタッフとしても手伝ってくれている。がき商店（防災教育も関連しているが、自分たちが作ったものを地域のみなさんに販売する場所）を開いたり、お手伝い券制度で、何か手伝いをすることで、いろいろなゲームをしたりすることもできる。地域の方と子どもたちにいろいろな形で手伝ってもらいながら、運営している。

コロナ禍でできることとしてやっているのは、「ごちそうさまプロジェクト」。教育委員会、行政の福祉課が協力し、宇和島市内の小中学校、幼稚園すべての子どもたちにチラシを配った。専用のラインがあり、1100世帯が登録しており、ひとり親世帯には毎月支援をしている。助成金ばかりを利用しては大変なので、フードドライブで市内から食料を集め、「ほんのきもち事業」として児童養護施設を出



たまなさんに届けている。10月にはキッチンカーを利用した子ども食堂を開いた。市民の困りごとを聴き、やることをいろいろ変えながら活動している。

<質疑応答>

<「こうちみませ楽舎」「越知ぜよ！熱中塾」のスタッフとして奮闘する学生の記録>

Q 宇和島市も廃校が増えてきているが、その利用があまりなく、課題になっている。高知では、他にも利用があるのか。廃校利用の成果や大変だったことは。

A 高知県の廃校活用は、室戸廃校水族館が先駆けとなり活発になっている。こうちみませ楽舎は高知市が主催となって行っている。御畳瀬地区の地域活性を図るうえで、大きな拠点が必要となったとき、場所として廃校を利用している。メディアで取り上げられたことで高知県内の廃校利用は活発になっているが、これ以上は閉校にしないようにという動きも出てきている。難しかったことはあまりないが、グラウンド整備や窓の整備が多かった。

Q 地域の受け込みがすごい。仁淀ブルー熱中塾では、どんな方から学んでいるのか。

A 最近では、ホンダ創設の話や創設者と一緒に働いてきた社員さんの話。高知の生コン事件の真相や環境汚染についての話。中島信也さんからCMを作るコツの話聞いた。

Q 人材は地域の人か？それとも、もっと広く探しているのか。

A 熱中塾が全国展開されている。熱中塾の教師陣はリスト化されていて、仁淀ブルー熱中塾では、一日に2人選ぶようになっている。一限目は必ず高知県内の地域の方、二限目はリストにある全国的に有名な方々から選んでいる。

Q 愛媛県も廃校が多いが、なかなか活用できていない。愛媛県は公民館が活用できていることもあり、そこまでの必要がないということもある。高知県は公民館にそこまでのコミュニティはないのか。

A 高知県では集落活動センターが拠点となっていて、そこでの活動が増えている。宿、商品開発、製造を行っているところもある。

Q 御畳瀬、浦戸、長浜地区では？

A ふれあいセンターという公民館に近いものがあるが地域活動の拠点とはあまりなっていない。そこで廃校を利用しようとなった。

Q 多年齢が関わることなど、運営するにあたっての難しさについて。

A 土佐弁。おじいちゃん、おばあちゃんの土佐弁。何を言っているかわからないこともあるが、社会人の方が仲介している。運営側が何かするというより、参加者同士、課題があれば解決している。正直あまりない。

Q 出合いがチャンスという言葉が心に残った。大学生が入るとすごく地域が盛り上がるのだが。学生とか外から入った方だと一過性の活動になりがちで、地域の巻き込みが大切だが、何か工夫は？

A 忘れないようにしているのは、私たちが地域に教わっているという気持ちを大切にしている。同じ目線もしくは、教わっているという目線を大切にしている。当事者意識をもって欲しいので、自分たちが思った疑問や課題に思ったことは投げ掛けるようにしている。

<コロナ禍でも子ども食堂がやれることは？と活動してきたこと。>

Q がき商店に行ってみたい。どうやって中高生を募っているのか。参加者は学校が違う？

A 企画した際にチラシを配り、学校に投げ掛ける。そうすると、人権担当の先生が呼び掛けてくれる。高校はネットワークがある、宇和島東高校はボランティア部。宇和島市の中学校はボランティア手帳があり記録するようになっている。学校に投げ掛けるときちゃんと子どもたちに伝わり、先生も来てくれる。募集するときは中学生 10 人。高校生 10 人。交流する場になってほしい。担当を決めてリーダーになってもらっている。宇和島市は地域ボランティアがここ数年で盛んになっている。中学校は生徒会同士がつながって活動を広げている。

Q いろいろな事業が広がっている。一つのことを決めてやっていくタイプが多い中、声を聞いていろいろなことをやっている。事業を多くするとき大変だったことは？なぜ広げていった？

A 中間支援という役割をやって、NPO、行政、企業ができることを見てきて、NPOが活発でないので補いたかった。子ども食堂の全国のネットワークとつながり学んだ。その分野に長けている人に頼んで学んでいった。いろいろなところにお世話になって一つのことができた。

Q 特に大切にされていることは。

A 今、困っていることを聞くこと。出会い、ご縁を大切にしている。恩送り。次に送っていけるところに送っていこうという気持ちで行っている。

<全体を通しての意見感想等>

Q 3世代の交流について。

A 子ども食堂に来ているときに高齢者の方が私たちにできることはないかと言ってくる。役割をもって活躍するところをしたい。

A 学校の活動でお世話になった。声を掛けてもらったことに喜んでいただいた。

Q 活動する中ですごいなあと思った人いるか。

A みんなカッコいいが、中尾先生。若者が地域で活動するのは邪道な部分がある。なぜ愛南が好きなんとな聞かれる。今では、田中さんといえば愛南といわれ。そこがモチベーションになっている部分がある。

A 格好いい大人の姿を見せようという活動を始めた。大人がかっこいいまちは必ず子どもの心に響き、子どもがどこにいてもまちのことを思っている。若い子が残っている地域は子どもが残っている。

A 地域の町づくりを教える学部にいる。学生は、自分が関わることによって地域が変わるなど、影響を与えることに関心がある。Z世代、すごいデジタルに強く、社会問題に関心がある。SDGsが出てきて、社会問題に関わるなど、世界を変えるようなことに価値観をもっている。

A 世界を見やすい。疑問に思ったときにつながる。知ることができる。自分で判断できる。グローバルに広がっているからこそ、逆に地域を見ている。

Q 今からの自分のこうしたいについて

A 異業種交流会を企てている。宇和島を盛り上げる。宇和島人という人マップを作っている。次の世代をいかに盛り上げるか、一緒に盛り上げていきたい。

A 子どもたちが体験活動できる場。人間牧場南予支部を作ろうとしている。

A 学生たちが地域に興味をもって卒業していけるようにサポートしている。

A 自分が地元に戻った時に地元のよさを伝えられる教員になりたい。

A 愛南町が大好き。大人になってからも伝えられるようにしたい。

A 今は、移住や企業との連携に関わっている。さらに広げていきたい。



大学生による中学生対象のキャリア教育

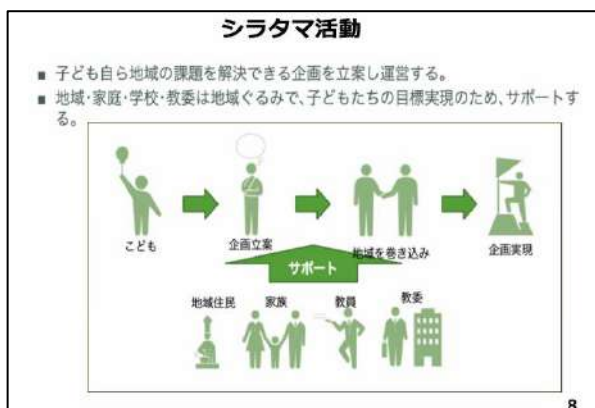
「シラタマ活動」から

徳島県特定非営利活動法人牟岐キャリアサポート 発表者 大西 浩正

徳島県南部牟岐町では、学生 NPO のひとつむぎによる中学生対象のキャリア教育プログラム「シラタマ活動」が 2015 年から実施されている。7 年を経過する中で、当時企画や運営に携わった大学生が、牟岐町職員として働くなどの「人材の循環」が起きている。また、牟岐町をフィールドに活動する大学生の数が増加し、牟岐町では若者関係人口に着目した事業が多数展開されている。

しかし、児童生徒数の減少に加えコロナの影響を受け「シラタマ活動」が十分に機能しなくなった。学校現場では、社会教育は後回しになってしまうためである。そしてこれまで活動をしていた大学生は地域での活動に制約を受けている。そこで、大学生たちは、平和学習や環境学習の支援を、オンライン・オフライン様々な方法を使って、学校現場で行うようになった。また、コロナ対策を考えながら、大学のゼミ支援を行ったり、地域実習を受け入れたりするなど、大学との連携を行うことができた。

今度もコロナ禍における社会教育の課題と今後の展望について考えたい。

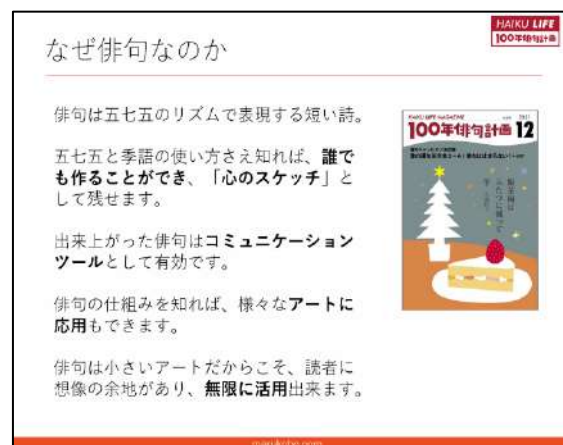


俳句はすべて宝物！100年俳句計画

マルコボ. コム 発表者 キム・チャンヒ

松山市をはじめ、全国には俳句でまちづくりを行っている地域が多数ある。それらの地域では、俳句を楽しく学ぶ事業が少ないためや、俳句を作らせっぱなしにしたり、当選発表に偏ったりするという理由から、「俳句は苦手」という子どもたちを生んでいる現状がある。

本来俳句は、コツさえつかめばとても簡単に自分を表現できる文芸である。俳句を作ったり、鑑賞することで活動を顧みたり、深く考察することもできる。俳句が苦手な子どもを減らす



には、まず俳句が簡単に作れるテキストが必要だと考える。

そこで、改良を重ねながら子ども向けのワークシートを作成した。さらにマンダリンパイレーツ（愛媛県の野球チーム）や学校とも連携し、子どもたちが楽しく俳句に親しむことができるような取り組みを行ってきた。最近では、松山市内の小学校の福祉体験事業と連携し、学習のまとめを俳句で表現する活動の支援を行った。また、俳句の出来不出来にかかわらず、俳句の楽しさを味わえる体験もすることが大切だと考える。

私たちは「100年俳句計画」という精神の元、JAZZ 俳句ライブ、クロヌリハイク講座、フォト俳句など、様々な俳句イベントを行っている。



<質疑応答>

<大学生による中学生対象のキャリア教育「シラタマ活動」から>

Q：大学生は宿泊する場所があるのか？

A：青山学院大学の場合は、民間の宿を安く提供してもらった。町の補助金を使って行っている。少年自然の家の存在もありがたい。しかしコロナ禍では、宿泊が難しい。

Q：青山学院大学・京都産業大学とのコーディネートはどのように行っているのか？

A：学校への呼びかけ、宿の手配などは私（大西）がしているが、町の教育委員会・産業課などが非常に協力的である。

Q：牟岐町には高校がないので、学生が集まる機会がない。大学生や高校生に活動の周知をするときの工夫はどのようなことか？

A：活動の周知は大変である。特に始めたときは、SNS 経由で学生が集まってくれていた。しかし、現在は個別に周知していかないと集まりにくい。数珠つなぎ方式で行っている。

Q：上手く活動をしていくコツはどのようなことか？

A：自分の役割は、学生と行政・学校・地域との通訳、活動しやすい環境を整えること。大学生や行政、学校がそれぞれしたいことがある。そこから共通点を見出していくことが大切。学校が総合的な学習の時間で何に困っているのかを見立てて、コーディネートしている。

感：一つの活動をコアにしているのが、素敵。

Q：どうやって大学とつながれたのか？

A：色々な研究会でつながり、短い周期で行動していくことで実現できて来た。

<俳句はすべて宝物！100年俳句計画>

Q：俳句への意識がどう変わっている？

A：はじめは子どもが自由に、既成概念で俳句を作っている。しかし、上手く先生が指導していると変化する。体験したことは、少しの声かけで大きく変わる。どこでつまづいているのか、見て、少しお手伝いするだけで、その子にしかできない俳句ができる。

Q：遠隔地でもお願いできるか？

A：リモートでも講座している。俳句キャンドル作りを岐阜県大垣市で行った。コロナ禍で子どもの表情が読み取れない不安のなかで行っている。コロナのおかげで、失ったものがあるが、オンラインでのこうした出会いはコロナで得たもの。

Q：俳句などの商品は、どのようにして作っているのか？

A：教材などは基本的に、私（キム）がデザインし、自社で作っている。そのため融通が利く。小1向けの教材や大人向けの教材など幅広く作ることができる。

Q：今度の展望を教えてください。

A：俳句を広げたい。俳句をもっと使うと街づくりに寄与する。子どもたちの俳句の苦手意識を変えていきたい。誰が詠んでもおもしろい新しい俳句作りを行うにあたっての仲間づくりが課題。自分たちがワクワクする楽しいと思える活動をしないと、子どもも面白いと思えない。クロヌリハイク事業は、敷居が低くやりやすい。言葉が新聞に書かれてるため今まで作れなかった人はいない。

Q：学校も学力向上、英語など大変である。学校と関わるときに、工夫があったのではないか？

A：学校からは、私たち民間は門前払いをされやすい。以前は朝日新聞とコンテストをコラボしてやっていたが、難しくなった。それを乗り越えるために、マンダリンパイレーツとコラボして、冊子を配布。学校には、なかなか信頼してもらいづらい。コンテストの関係で、つながりをもてたこともあった。

Q：学校や教員などの変容があれば教えてください。

A：なかなか変わらない。年に1度くらいだと、教えなくていい。子どもは一度きりなので、忘れる。学校だけでもダメ、外からでもダメ。だから雑誌に載せるなどのお願いもしている。自ら俳句を書きたいと思うような子が表れてほしいが、先は長い。

Q：キムさん、次のターゲットは？

A：作って、表彰する流れがあるが、それ以外に何かないか。次の作家をどう生んでいくか。どう若手につないでいくか、環境をつくっていくか。

感：シラタマ活動でも使いたくなる教材である。作りっぱなしに共感。プログラムを作っていて、自由にさせるだけでは方法が分からなくて困る場合もある。ワークシートなどでできると、子どもたちの自己肯定感が上がるのではないか。



分散会 10

ファシリテーター 舟田 美加
分散会記録者 須山 華鈴

中高生・大学生・大人の多世代交流の対話プログラム

特定非営利活動法人 だっぴ 発表者 代表理事 森分志学

「だっぴ」は、若者のキャリア教育を中心に、教育と地域コミュニティをつなげ、地域振興にも携わる活動を行っている。主な活動としては、中高生、大学生と地域の人との多世代交流の学び合いの機会である「中学生・高校生だっぴ」があり、若者と大人、学校と社会とのつながりをつくることにより、中高生が自分の生き方や働き方について考える刺激となっている。また、「中学生だっぴ」に参加した中学生の変容についてまとめた「岡山中学生白書」を作成し、地域に発信している。だっぴの活動は、岡山県を中心に各地域でローカライズできるように実行委員会を立ち上げて運営しており、鳥取県には鳥取支部を設けるなど、県外でも活動している。スタッフについては、岡山県内の大学生を中心とした「だっぴキャスト」が担っており、現在約300名のキャストが登録している。その他の活動の一つとして、中高生のためのフリースペース「INBase（インベース）」を10月からスタートし、試行錯誤しながら運営中である。今後も若者と大人をつなぐ「つながり」のハブとして頑張っていきたい。



「植物工場」の認知度向上のための教育コンテンツ開発

—教育でつなぐ農業の魅力、届け日本の未来へ—

愛媛県立伊予農業高等学校 食品化学科 発表者 愛媛県立伊予農業高等学校食品化学科

農業従事者の減少が進む中、伊予農業高等学校食品化学科では、「農業の魅力を伝えたい」という思いのもと、Micro Plant Factory（極小植物工場）の開発及び、認知度向上のための教育コンテンツ開発に取り組んでいる。これは、栽培体験と学習を1パックの教育コンテンツとして交流学习を実施する水耕栽培キットで、2019年度の卒業生が開発した。様々な改良を重ねながら、二代目水耕栽培キット、そして現在の「Micro Plant Factory（三代目水耕栽培キット）」が完成した。小学生とのリモートを含めた交流学习では、学生自ら作成したオリジナ



ル学習冊子(1～3年生向け、4～6年生向け)と水耕栽培キットを使用し、実際に参加した児童や小学校の先生方からも大変好評であった。農業の魅力を感じた子どもたちが将来の農業の担い手となる可能性を高められるように、農業教育、環境教育、エネルギー教育、ICT教育、食育の5つの教育的要素を持つこの取組の更なる開発と交流学習を進めていきたい。



<質疑応答>

<特定非営利活動法人だっぴ>

Q 森分さんが、NPOの活動を行うようになったきっかけは？

A 一度東京で就職したが、当時の代表に戻ってきて欲しいと言われて…。向いてないと言われた時期もあったがめげずに続けている。

Q この活動の資金はどのようにしているのか？また、参加者の募集はどのようにして行っているのか？

A 行政の予算を使っている。「中学生だっぴ」は主に学校の授業の一環として行っているため、教育委員会から依頼されている。また、支援企業があり、その企業からの支援も受けている。

Q キャストの育成はどのように行っているのか。

A ファシリテーターの基礎研修を2時間と、学校によって条件が異なるため、事前研修を2時間、計4時間の研修を行っている。

Q コロナ渦により、オンラインの事業など、何か工夫して取り組んでいることはあるか？

A Zoomを使って、オンラインで実施している事業もある。オンラインは、対面と異なり、つながりにくさも感じる。また、システム上のトラブルなどもあり、試行錯誤しながら実施している途中である。

Q 人集めや大学生キャストなどのスタッフを集める最初の入口はどのようにしたのか。

A 元々大学生発の取組である。イベントのみを行っている時代は、何かしたいという大学生が行っていたが、近年では参加の壁が低くなった。また、「中学生だっぴ」をスタートしてからは、教育系のボランティアに興味のある学生が参加するようになった。口コミがメインだが、最近は大学の授業の一環で参加する学生も増えてきている。

Q 大学生キャストは、岡山県内の様々な大学から参加しているのか。また、教育系のボランティアに興味のある学生が近年増えたとあるが、全体的に教育学部系の学生が多いのか。

A 岡山県内を中心に様々な大学から参加している。また、美作大学には、「だっぴサークル」と称し、サークル活動として参加してくれているところもある。県外では、鳥取県に鳥取支部があるので、県外の大学生もいる。教育学部系の学生は体感では6割くらいである。

Q 参加した中学生の感想で、特に印象に残っている感想は？

A 「大人と話してみると自分と近いところもあって、ちょっと大人も信用していいかなと思った。」と語っ

た中学生がいたこと。また、「人と話すのは苦手だけど話してみると楽しかった。」という声もあった。異なる他者と出会ってそれを受容した時の気づきが重要だと感じる。計画された偶発性だけど、異なる他者との出会いによる気づきがあればいいなと思う。

<愛媛県立伊予農業高等学校食品化学科>

感 先日、尾道で1ターンして農業を行っている方の話を聞いたが、やはり地方創生に農業は重要だと思った。

Q ソーラーパネルの値段は？また、一般でも購入可能か？

A LEDは市販のもので、ホームセンターにて約400円で購入可能である。

Q タブレットは具体的にどのように活用したのか？

A タブレットは植物の成長記録や学習冊子の作成の際に活用し、また、小学生とのオンラインの交流活動でも使用した。オンラインでの活用では、新型コロナウイルス感染拡大により、2回目の交流学习時にZoomを使用して実施した。Wi-Fiの調子が悪くトラブルもあったが、その反面コロナ禍でありながら小学生には貴重な学びとなっていたようである。

Q 小学生と交流をしてよかったと思ったことは？

A この地域実践交流集会在きっかけで、伊予農業と佐礼谷小学校と交流学习が実現した。コロナ禍でなかなか人と交流する機会もなく、また、人に何かを教えるという機会もなかったため、そういった経験ができて本当によかった。

感 素晴らしい活動だと思う。自分自身がしっかり勉強しておかないと相手には教えられない。オリジナル冊子もすごく作り込まれていて素晴らしい。きっと小学生からしても大きな学習の手がかりになっていると思う。

Q 更なる改善点とあったが、どのようなものがあるか

A 改善点としては、学習冊子の対象を更に細かく分けることである。そして、小学校との交流学习をもっと広めていきたい。

Q 水耕栽培でできた野菜はおいしい？栄養的に土と何か変わりがあるのか？

A バジルやトマトを栽培したが、どれもおいしく栄養素的にもそんな色なかった。

Q 栽培技術の研究と教育コンテンツのふたつの取組を行っているが、比重的にはどうなのか？どちらの方が楽しいとか好きだというのはあるのか？また、それぞれで班分けして行っているのか？

A 食品化学科は、2年次から4つの専攻に分かれる。食品化学班を専攻しているのは、2・3年生合計で20名（担当の先生は各班に1名）。研究活動では分担せず、みんなで両方（コンテンツ開発と研究）の取組を行っている。両方とも楽しい。

<企業との連携の視点から>

○ おのみち寺子屋は、元々青年会議所が立ち上げたイベントのため、80の企業が協賛してくれている。青年会議所を経由するといろいろと幅も広がるのではないかと。

○ 伊予農業高等学校は、資金は基本的にない。学校の活動の中で、何か作れるものはないかと開発している。利益を求めていないため、作ったコンテンツは有料化したくないという思いがある。この点が企業とタイアップしにくい理由となっている。

<コロナ渦で困ったことやコロナ渦だからこそできたこと>

- オンラインは、物理的距離を関係なく行える点が強みである。おのみち寺子屋はOGOBが全国に1000人以上にいる。そういった人とZoomでコミュニケーションを取ることができた。
- オンラインだからこそできたつながりもあった。
- 今まで自分から挙手したり意見を言ったりできなかった子どもでも、オンラインだとチャットなどで自分の意見を積極的に言えるようになってきている子どももいた。今までの教育の形がすべてではないなと感じた。オンラインだからこそできた表現もあった。

<全体を通しての感想等>

- いろいろな発表を聞いてパワーをもらった。
- 自分が今まで聞いたことないこと、知らないこともあって新たな学びがあった。
- どちらの活動も素晴らしいと思った。自分は障がい者を支援する活動を行っているが、そういう子たちは普通の中学生よりもさらにつながりの場が少ない。対象者を広げていってもらえるとありがたいなと思った。
- 高校生の立場から見て、コミュニケーションが苦手な子が周りに多い。将来の夢についても恥ずかしがって話さない子も多い。こうした大人と話す場所というのは非常に魅力的だと思った。オンラインになることで今までよりもハードルが下がっているように感じるので、より中高校生に参加を呼び掛けて欲しい。



分散会 11

ファシリテーター 鍵山 直人
分散会記録者 幸島 恭輔

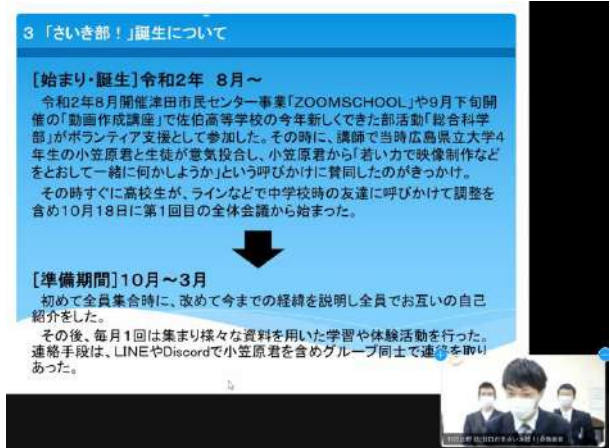
ふるさとを自分たちの力で元気にしたいと、地元の高校生が「さいき部！」をつくる

津田市民センター 発表者 さいき部！（塩田 成陽、中西 稜、太田 優希、河野 凪紗）

中学校から友人であった、廿日市市の中山間地域である佐伯地域の地元高校生が活動している。市民センターのzoom講座や動画作成講座の活動がきっかけで、「さいき部！」が誕生し活動が始まった。

桜の咲く風景などサイクリングしながら、春夏秋冬の佐伯地域の映像を動画に撮影、編集して配信することにより、人口の減っている佐伯地域を「知ってもらいたい」「地域を元気にしたい。」と活動している。また、地域の高齢者の方から、ゴミの収集日が分かりにくいという声を聞いて、見やすく分かりやすい「ゴミ収集カレンダー」を細かなレイアウトにまでこだわって製作し、自分たちの活動が地域の役に立っていることを実感するなど、市民センターで活動することにより地域の人たちに巻き込まれながら多くのことを学んでいる。

精力的に活動をする中で、課題も感じている。別々の高校で活動しているため、活動時間が限られていることが課題となっている。さらに、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、今後どのように活動をするのかも課題となっている。また、同級生の集まりであるため、来年多くのメンバーは受験を控えており、この活動をどのように続けていくかという課題がある。様々な課題がある中で、限られた時間の中でどのように地域に貢献できるのかを模索している。



Q コロナ禍での制限の中で見つけた新しい発見はあったか。

A オンラインでのやりとりが増えたからこそ、遠くの人と話す機会が増えるなど、新しい関わりができた。

Q 将来も佐伯地域で暮らしたいというイメージをもっているのか。

A 地元が本当に大好きで、生きている限りは自然豊かで、優しい人々のいるさいき地域で過ごしたいと思っている。

大学は外に出る予定だが、いつかまた佐伯地域に戻ってきたいと思っている。

あらたなコミュニティのカタチ

あらたなつながりのハジマリ

えひめ地域こども食堂ネットワーク 発表者 難波江 任

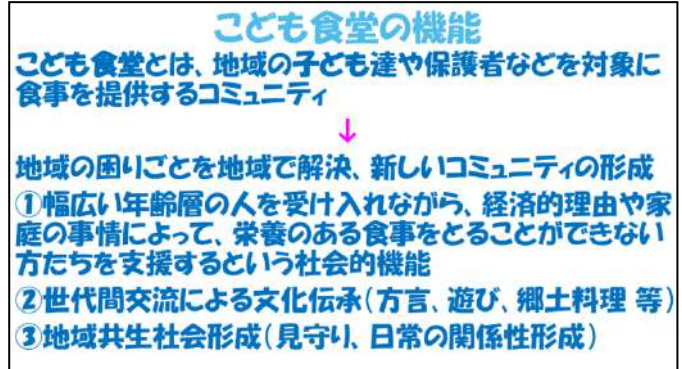
昨年3月に愛媛のこども食堂セミナーでえひめ地域こども食堂ネットワークが発足した。2012年に東京都で始まったこども食堂が全国に広まり、全国各地でいろいろな形のこども食堂ができた。愛媛県にも少なくとも83か所のこども食堂があり、小学校数ベースで比べてみると、愛媛県はこども食堂の数は多いと言える。

こども食堂の数は増えてきているが、昨年から

新型コロナウイルスの影響で休止するところも多くあり、高齢者施設で行ったり、コロナ禍であることを考慮して、テイクアウトにしたりして、工夫して活動を継続している。

セミナーを開いてネットワークを広げ、交流を促進したり、相談窓口を設けたり、フードバンクと連携したりして、活動の幅を広げながら継続している。

こども食堂は、地域の子ども達だけで食事に来ることができる子どもの居場所、コミュニティであったが、幅広い年齢層の人を受け入れながらいろいろな人を支援する社会的な機能や、地域の共生社会を形成するなど、様々な機能を果たすようになってきている。



Q どのくらいの頻度で開催しているのか。

A 規定はなく、個々に決めている。毎日やっているところもあるし、月に数回のところもある。約半数はボランティアの活動になっているので、参加者の都合に合わせて日程を調整している。

Q 本当に必要な子どもが参加することができているのか。

A 支援が必要な子どもだけのこども食堂にすると、来にくくなることもあるので、誰でも参加できる食堂にしている。その中で一人でも本当に支援が必要な子どもがいればよいという考え方で活動している。

Q 広報で工夫していることはあるか。

A チラシを学校、幼稚園に配ったり、SNSで発信したりしている。LINEのグループを作って情報発信している。宇和島では、LINEグループに約300人が登録している。

Q 食堂の機能を越えて、コミュニティの機能が大きくなってきている。スムーズな運営に見えるが、困っていることはあるか。

A 資金的な困り感は多くの団体が抱えている。資金の支援をいただけることもあるが一回で平均80人から100人の参加があり、2万円程度の費用がかかっている。この費用をどう賄っていくかが課題となっている。寄付を募ったり、支援を呼びかけたりしている。

Q 困り感を抱えた子どもの家庭とつながれた事例はあるか。

A LINEグループに参加してつながりを作っているのが、家庭と連携をとることができている。常時好きな食料を取りに来られるようにしているところもあり、こども食堂をきっかけとしてつながることができている。

<感想>

- ・ これからのさいき地域につながるように、後輩にもPRしてリクルートしてほしい。
- ・ 小中学生にも地域の魅力を発信してほしい。
- ・ 新居浜公民館も、次世代ネットワークを立ち上げて、11名で活動して防災事業などを行っている。それを見た中学生も加入したいと言ってくれている。中学生にボランティアを呼び掛けるのもよいきっかけ作りになる。
- ・ ぜひ後輩に引き継いで、さいき部の活動を続けてほしい。
- ・ 学生を頼りにすることで彼らが力を発揮する。学校種を超えた関わりがすごくいいチームワークになる。
- ・ 誰かと話しながらご飯を食べることはすごく大切だと感じる。コロナ禍で大変とは思いますが、続けていただけることに感謝している。
- ・ 多世代が参加できることも食堂が増えていってほしい。
- ・ コロナ禍で活動が止まっているところもたくさんあるが、参考になる活動がたくさん聞いてよかった。
- ・ 今の学生の活動を見ていると、いろいろな活動を通して社会と触れ合うことができる場がたくさんある。日本の未来は明るいと感じた。

<意見交流>

○ 新居浜公民館

次世代ネットワークを立ち上げ、高校生が活動している。防災活動を展開している。県外の同じような活動をしている方に話を聞いて、これからの活動を考えていきたいと考えている。

Q 防災は地域とも協力できる。なにがきっかけで防災の活動を始めたのか。

A 防災キャンプがきっかけでこの活動を始めた。先輩の姿を見て、自分も活動をしたいという思いから始まり、次世代ネットワークを立ち上げることができた。

Q 新居浜公民館は、公民館事業に中高生が関われるようなシステムができているのか。

A 中学生に関わってもらえる事業にしている。それをきっかけにして、ずっと関わってってもらっている。

Q 中高生に関わってもらおうコツはあるのか。

A 中学校の校長先生に理解、協力をいただいたことが大きかった。中学校に何回も話をしに行かせていただいた。子どもたちを主役にして活動を進めることを大切にしている。

○ おのみち寺子屋

学生スタッフとしてNPOで活動している。おのみち市の小学生と100kmを歩く活動を行っている。新型コロナウイルスの影響でここ2年間中止になっているが、他にも学習支援などを行っている。最近、ハイブリッド寺子屋という活動を始めて、対面とオンラインの両方を使って子どもの学習支援をしている。いかに子どもに楽しく学習してもらえるかを考えながら活動している。

○ 何もしない合宿

企画も準備もないお泊り会を月に一回行っている。しかけをしないと地域とつながりにくい時代になってきていると感じるので、自分の参加したい気持ちがあれば参加できる活動を続けてきた。消防団で、ゆるやかにミニゲームが楽しめるスポーツ教室をしていて、8種目のスポーツを楽しんでいる。金銭的負担なく、子どもたちの希望だけで参加できる活動にしている。つながりの力で地域を活性化させることができると実感することができている。



分散会 12

ファシリテーター 赤石 雅俊
分散会記録者 宇津 博美

志比内地区公民館の地域自治活動

東神楽町 発表者 山本 進

北海道東神楽町にある志比内地区は、人口 100 人程度の小さな地域である。志比内地区では、地域ごとに自分たちの町づくりを考え、実行するための仕組みを作るという目標を掲げ、公民館ごとに「地区別まちづくり計画」を策定している。

まず、少子化の進む志比内地区は、小学校を存続させ、学校を核とした地区を作るため、平成 5 年に道内唯一の山村留学制度と小規模特認校制度を導入した。これにより、志比内小学校では、親子での移住を基本とした親子留学方式と町内の他校区からの通学が実現した。特に山村留学では、自然に恵まれた地で子どもたちを学ばせたいという方が全国から訪れ、空き家や公営住宅を使い、親子で住みながら学校に通っている。その結果、現在地元児童の在籍はないが、山村留学をしている児童で小学校を維持している。子どもたちは、小規模でアットホームな雰囲気の中、先生方との良好な関係性のもと、恵まれた自然や地域の熱いサポートに支えられながら学校生活を送っている。スキーや一輪車に取り組んだり、地域の方と餅つきをしたりするなど、地域と関わりながら活動する特徴的な小学校となっている。地域は、少子高齢化が進んでいるが、山村留学をした親子が定住するという例が増え、空き家が少なくなるという課題が出てきた。人口は減っているが、山村留学があることで地域の活力があり、比較的若い人がいるという現状である。

次に、平成 26 年度には、志比内地区の行政区の統合について進めた。50 年程前に分裂していた地区を統合し、公民館をまとめ、自治公民館のような形で新たに発生させた。また、公民館の建て替えを計画し、様々な機関からのバックアップを受けながら進めた。北海道大学工学部の教授とワークショップをして、模型を作り計画を立てた。自主管理をすることを念頭に置き、自分たちが使いやすく、山村留学の子が泊まれるようにしたい、オープンキッチンにしたい等地域のみんがアイデアを絞って作った。地域住民にとっても、満足度の高い公民館が完成した。愛称を「さくらプラザ」とし、地区公民館、消防会館併設、地域防災拠点、警察官立寄所などの役割を担う建物となった。公民館施設を核としながら、地域の自治の力を上げていきたい。

地域自治の取組み

志比内地区のまちづくりの目標

- ①豊かな自然を活かした活力ある地区作り
- ②生活しやすい地区を作る
- ③みんなが集える場所を作る
- ④学校との連携で内外に開かれた地区を作る
- ⑤行政区の見直し

地域で特に重要な取組みとした内容

- ・山村留学を継続し、小学校を維持する。
- ・人口構成から行政区の在り方を検討する
- ・気候に強い、集える場所を確保する。

小規模校での取組み

4月	入学式 山村留学歓迎会	10月	学芸会 音楽の集い
6月	遠足(花神楽へなど) 森林教室①	11月	町児童・生徒作品展
		12月	しびないっ子餅つき
6月	三校交流学習会	1月	スキー学習 百人一首会(休日春闘日)
	運動会 修学旅行		冬の集い
7月	三校交流学習 水泳学習 町民ふえること運動会	2月	スキー遠足 新1年生を迎える会
	夏の集い		卒業式
8月	ヤマメ放流 志比内地区盆踊り	3月	PTA卒業を祝う会 サケ放流式
9月	志比内地域行事(子ども神輿) マラソン記録会森林教室②		

公民館の建替え

【ワークショップでの意見(一例)】

- ・屋外での地域イベントを公民館前で開催できるよう駐車場を広くする
- ・山村留学の体験時などに利用できる宿泊室が必要
- ・宿泊室は男女別や家族ごとで利用できるような複数あった方がよい
- ・誰でも使えるオープンキッチンがいい
- ・地域住民が自由に入出入りできるようにしたい

ふるさとを愛する心を持った子どもを育てる

「ふるさと体験塾」

双海町子ども教室実行委員会（双海地区公民館） 発表者 出海 佑樹

伊予市双海町は、平成17年に伊予市、中山町、双海町が合併し、現在の伊予市となった。伊予市は、愛媛県の中央付近に位置し、双海町は、伊予市の南西部の伊予灘に面した地域である。双海町内には3つの小学校があるが、児童数については、この20年で約65%減少しており、「双海町子ども教室」の運営にも影響が出てきている。

「双海町子ども教室」とは、地域の魅力を生かした様々なプログラムを体験することにより、ふるさとを愛する心をもった心身ともに健全な子どもを育てることを目的とした事業である。この事業は、「ふるさと体験塾」、「おもしろ大作戦」、「わくわく生活体験夕焼け村（通学合宿）」の3つで構成されている。「双海町子ども教室」を実施する組織として、地域の有識者や各種団体、学校の先生方に集まっていただき、実行委員会を組織している。現在、この実行委員会が中心となり、町内外の有志や中高生、大学生、学校関係者、保護者等がボランティアスタッフとして参加し、「地域の子どもは地域で育てる」を合言葉に様々な方の協力を得て活動している。

双海町子ども教室の概要
「双海町子ども教室」とは・・・
双海町の子どもたちの健全育成の推進を目的として行う
①「ふるさと体験塾」
②「おもしろ大作戦」
③「わくわく生活体験夕焼け村（通学合宿）」
の3事業の総称が「双海町子ども教室」です。
現在、町内外の有志、中学生、高校生、大学生、学校関係者、保護者等がボランティアスタッフとして参加し、「地域の子どもは地域で育てる」を合言葉に、様々な方々の協力を得て活動しています。
各回の開催地域にちなんだ特色のあるプログラムを行い、より深く地元を知るきっかけにし、同時に、地域ぐるみで子ども行事を行うことにつなげたいと思っています。

「ふるさと体験塾」は、双海地域の魅力あふれる自然・文化・産業等に触れ、体験活動を行うことにより、ふるさとを愛する心をもった心身共に健全な子どもを育てることを目的としている。3つの小学校から集まった1～6年生の男女をそれぞれまんべんなく割り振ることにより、上級生が下級生の面倒を見たり、違う小学校の参加者との交流を深めたりすることができるのが特徴である。「おもしろ大作戦」は、長期休暇等を利用して工作教室等を行っている。ふるさと体験塾とは異なり、その都度募集した参加者と共に活動している。「わくわく生活体験夕焼け村（通学合宿）」は、異年齢の子どもたちが一週間の共同生活を行い、学校へ通いながら炊事、洗濯等の日常生活を体験する。この体験活動を通じて、家庭や家族の大切さを認識すると共に、共同生活の中で仲間づくりや自主性、協調性、他人を思いやる心を育むことを目指している。また、ふるさとを愛する心を育て、少年期における思い出作りを行っている。今年度は、参加者にコロナ禍の中での新しい生活様式の習得も目指して実施することができた。「ふるさと体験塾」は、体験活動を通じ、地域とつながり地域への恩返しや地域に貢献するとはどういうことかということ学ぶことができる。子どもたちは、この体験を通じて地域との関わりの中で、自己肯定感を高めたり、厳しい世の中を渡り歩いていくための社会性を身に付けたりしている。この事業は、多くの団体や有志ボランティア等が関わり、子どもたちのために頑張ってくれている。年々、市の予算が削られ様々な活動の見直しが進められているが、子どもたちや地域のために継続するべきだと思っている。長く事業を続けるポイントは、地域の方が事業を支えているというこ

①開講式・野外活動の基礎



共同生活の中で仲間づくりや自主性、協調性、他人を思いやる心を育むことを目指している。また、ふるさとを愛する心を育て、少年期における思い出作りを行っている。今年度は、参加者にコロナ禍の中での新しい生活様式の習得も目指して実施することができた。「ふるさと体験塾」は、体験活動を通じ、地域とつながり地域への恩返しや地域に貢献するとはどういうことかということ学ぶことができる。子どもたちは、この体験を通じて地域との関わりの中で、自己肯定感を高めたり、厳しい世の中を渡り歩いていくための社会性を身に付けたりしている。この事業は、多くの団体や有志ボランティア等が関わり、子どもたちのために頑張ってくれている。年々、市の予算が削られ様々な活動の見直しが進められているが、子どもたちや地域のために継続するべきだと思っている。長く事業を続けるポイントは、地域の方が事業を支えているというこ

とだと考える。事業担当者として、今後も地域と子どもたちをつなげることを意識して事業を実施していきたい。

<質疑応答>

<志比内地区>

Q 町内に7つの公民館があるということだが、それぞれ小学校があるのか？

A 今は、3校の小学校がある。

Q コミュニティスクールの取組があるのか？

A 全部の学校が6～7年前くらいから実施している。

Q 役場の職員は、公民館の建物の中でどのような関わりをしているのか？

A 公民館主事を配置していない。自分たちが自主的に管理をする。中央や市街地の公民館は、午前中に役員が常駐しながら公民館活動をしている。社会教育課（地域の研究作り課）が手伝っている。

Q 山村留学に関して、小学校を卒業しても一定数は定住するということが、親子が感じるデメリットに関して、行政としてサポートしていることは？

A サポートは、あまりしていない。補助金は出す。空き家の手当は、地域の方が行う。

Q 山村留学をしたいと手を挙げた人は、みんな参加できるのか。抽選等があるのか。

A 抽選等はない。過去には、空き家がなくて留学を辞めた人もいる。地域の方と交流してもらうことが大切なので、公民館で何泊かしてもらい、体験的に活動をする中で判断してもらう。

Q 分裂していた地区をどのようにまとめたのか。

A 50年前くらいに喧嘩別れをした地区だった。孫の世代になり、本人たちがまとめていきたいという思いをもって動いた。サポートをしながら、まず2つの区をまとめて、その後志比内全体をまとめていった。地域の自治組織が自分たちで判断していった。

Q 人口100人くらいの地域で、学校が地域の中にあることが大事だと思った。地元の子どもがいない状況で、地域はどのように学校に関わっているのか。

A 公民館行事に子どもが参加することや小学校の行事に地域が参加していることが多い。例えば、小学校の運動会に地域の競技が入っていて、運動会が終わった後は、みんなでBBQをして過ごすことがあった。このような地域の交流を深める行事を季節ごとにやっている。

Q 公民館のさくらプラザの改築にあたり、北海道大学からのアプローチはあったのか。

A 改築の提案は役場が行った。ワークショップのできる人を探し、北海道大学の教授に来てもらった。

Q 公民館は、人が集まりやすくなったのか。

A 地域の人自主管理のもと、鍵を掛けず自由に使えるようにしている。みんなが安心して使える。今のスタイルに合わせた公民館作りを行うことで、生活の拠点になっていると思う。

<双海地区>

Q ジュニアリーダーは卒業しても活動することがあるのか。また、大人になっても繋がりはあるのか。

A 中学校を卒業して高校生になっても、ほとんどの子が活動に参加している。中には、高校進学で町外に出た子や大学進学で県外に行った子がジュニアリーダーとして双海に関わりたいという思いで参加してい

る子もいる。ジュニアリーダーを卒業した子は、声を掛けたら積極的に参加してくれる。しかし、公民館主事が把握していない卒業生と連絡が取れていない。そこで、卒業生が地域とつながることのできるグループか何かを立ち上げないかと計画を立てているところ。

Q 通学合宿をする時に、3つの小学校を対象に実施しているのか。

A 全ての小学校を対象として実施している。

Q 通学合宿の登校は、保護者の送迎なしでもできるのか。

A 登校については、町内のタクシー会社をお願いしてタクシーを手配している。また、職員が公用車で学校の近くまで送迎している。

Q コロナ禍を踏まえた新しい活動への変更などはあるのか？

A 新しいプランのビジョンはない。しかし、今ある事業をどうすれば縮小しつつも実施できるかを考えている。今までの活動をなくさないように工夫をしている。

Q 一年間を通してプログラムを行っていて、子どもたちにとっていい体験になっていると思うが、子どもたちが変わったと思うエピソードなどはあるか？

A 1年生から6年生まで参加してきた高学年の子は、成長している過程を見ることができる。低学年の子どもは、5月当初と3月を比べると成長を感じる。入学したばかりの子どもたちはそわそわしているが、年間を通して、ある程度ルールを分かりきちんとしていくことができるようになっていく。

A 双海地区は中学校が1つで、3つの小学校を卒業した子どもたちが同じ学校に入学することになる。中学校入学前に関係性ができるところがメリットである。地域の中で子どもたちが認識され、地域の方も子どもたちに認識されて、先生方も参加してくれるので、先生方との関係性もできてくるのがいいところだと思う。

Q 楽しい活動で終わらせないために、ジュニアリーダー会以外でアウトプットする機会はあるか。

A ジュニアリーダーのOBやOGで地域に関わることのできる団体を考えていこうと思っている。

Q 合併をした後に、地域のコミュニティに戻ったことはあるのか。

A 旧双海町の方の中には、伊予市になった後も双海町という感覚をもっている人が残っている。双海町内で見ても、「上灘」「下灘」という意識はある。

<全体を通しての感想等>

○ どちらの事例も差し迫った状況に合わせた成功事例だと思った。北海道の事例は、一つ一つの実践の積み重ねが繋がっているのが素晴らしいと思った。双海地区の事例は、縦の繋がりで脈々と人材が育っているように感じた。次世代に繋げていくような努力をしないといけないと思った。

○ 学校だけでなく、地域や家庭全体で子どもたちを育てていく必要性を感じた。宇和島市では、少子化が進んでいるため、様々な行事に高齢者の方に参加してもらい、交流を図った。

○ 2つの事例を聞いて、参加できる場作りが大切だと感じた。山村留学や地域のコミュニティ等の場をもって、自分たちの地域をどうしたいのかを考えるきっかけを与えてあげる必要がある。参加者は、その時々によって意識が変わる。子どもたちは、楽しいでいいと思う。その時々で意識付けをすればいいと思う。ウェルビーイングは、幸福という意味がある。地域の課題が多いと言うが、本当に問題なのかと思うことがある。住民が幸せなら、人口が少なくてもいいと思う。幸せに生活していくために、社会教育があればいいなと思う。

○ 自分で自己決定をしていくことが幸せに繋がるのではないかと思います。



分散会 13

ファシリテーター 遠藤 敏朗
分散会記録者 平田 育嗣

認定NPO法人カタリバ

東日本大震災後における大槌町教育復興・魅力化事業 発表者 菅野 祐太

東日本大震災の津波によって大槌町は住民の約1割が犠牲となり、町長をはじめとして役場職員においても多くの方が被災し行政機能も麻痺した。しかし、大槌町は「教育」を軸に震災からの復興を図り、地域外の東京のNPOであったカタリバを受け入れて、新たな教育を模索し10年が経過した。どんな環境に生まれ育っても未来をつくだす力を育める社会を実現するために、意欲と創造性をすべての10代へ届ける活動をしている。全国10箇所強で、130名弱の職員で活動を行っている。



はじめたコラボ・スクール



コラボ・スクールに参加した保護者から『震災のために仮設での生活を余儀なくされ、落ち着いて勉強のできる環境ではなく、町の学習塾さえもなくなってしまう。そんな中、コラボ・スクールを立ち上げていただいたことは本当にありがたく、心から感謝しております。』という声があった。

高校生が町の課題を解決していく「マイプロジェクト」というプロジェクトを立ち上げた。具体的な取組として、震災で写真も流されてしまったので笑顔の写真を配って、地域の人たちを元気づける笑顔 Photo プロジェクト、マイプロジェクトを地域住民の前での発表、復興まちづくりを通して生まれたモデルケースなどがある。また、大槌を教育で復興させるようと大槌町教育大綱を徹底熟議型で策定した。高校が町内からなくなることで起こる損失として、高校生の親となる働き世代ほど、近隣の市町村に転出してしまったり、億単位の経済的な損失があったり郷土芸能など次代の中心的な担い手を育成することができなくなったりしてしまうことがある。それから、高校の魅力化を考えた。具体的には、『大槌湾を訪れるウミガメとのふれあい』、『三陸みらい探求』、『自分プレゼン』など多方面にわたる。これらのことにより、管内県立高校の出願者数が増加した。現場に寄り添った立場・視点から、緊急時こそ民、社会教育の力が重要となること、熟議を重ねて策定する方向性は、様々な人が協力する土台となること、危機感から始まった地域高校の存続プロジェクトが地域の協働を生み、結果として高校生の成長につながることを伝えたい。

CIL 星空

障害者の自立支援 発表者 井谷 重人

井谷さんたちは実際に障害をもつ人間が中心となり、『障害者が障害のない人と同じように暮らせるようにしたい』、『障害を理由に「でき





ない』ということをしてなくしたい』という思いのもと、地域で一人でも多くの障害者が自立生活を行えるようにするための支援、サービスを行っている団体である。しかし、地域での自立生活を望む障害者にとって、それを受け入れる社会にはまだまだ多くの問題が存在する。そんな障害があることでの「生きづらさ」をなくすためには、私たち障害者など、実際に不便を感じている人たちが自身の声を世の中に届け、社会に反映していくことが何よりも大切である。実際に自立生活を始めた障害者

が自立して良かったと思える社会を目指し、それこそがすべての人にとって生きやすい社会になると信じて、自分自身が障害者であることの強みを活かしながら、社会にある「生きづらさ」をなくすため日々活動している。

自身の経験として、障害者は『待つ存在』だと感じた。社会モデルの考え方として、障害は個人になるのではなく、社会の環境にあるということを考えていきたい。2016年4月に「障害者差別解消法」が施行されたのだが、差別の物差しが違うから議論がかみ合わない。共通の物差し、差別の定義が必要なのではないか。健常者と障害者に分けられて育つせいで、お互いのことを知らない。子どもの時から分けられているのに大人になってから『共に生きる』というのは無理である。相手を知らないことが関わりを難しくさせている一番の原因である。それを踏まえてお互いが対等になる方法を一緒に考えていきたい。自立心は心構えでできるものではなく、学びの中で持つものである。



<質疑応答>

<認定NPO法人カタリバ>

(谷山さん) Q. 中学校の教諭なのだが、中学生ができることはあるのか？

(菅野さん) A. 中学生たちが思ったことから始めるとよい。地域に出かけて、任せようとする姿勢が大切である。

(井谷さん) Q. 障害をもっている人は災害などがあった時に後回しにされてしまう。そんなことを見かけたことはあるのか？

(菅野さん) A. 『弱い存在』である子どもたちや障害のある方は、つらい環境に置かれていた。その人たちの声をどのように拾っていくかが大切である。

(吉田さん) Q. 中学校で高校生が伝えていく場合は、どのようなものを教えていただきたい。

(菅野さん) A. 「自分プレゼン」という企画を紹介する。高校生が中学校でやっておけばよかったことを話す。中学生は高校生への憧れを抱く。高校生は少し背伸びして中学生に話す。段差のあるつながりが重要である。

<CIL 星空>

(菅野さん) Q. 「自立」は子どもにとっても必要であると考えのだが、周りの大人はどう見てい

けばよいのか？

(井谷さん) A. 守らないといけないと考えている人が多い。しかし、現実とのギャップが多い。

学校では、子どもの力を信じていないのではないかと感じる。どんどんチャレンジさせていくことが大切である。「責任と自由」はイコールであり、最後までやり遂げる経験を積み重ねることが必要である。そのためには寄り添っていかなければならない。

(菊池さん) Q. 公民館でも「思いやりを持つ」ことを大切にしているのだが、上辺だけなのかもしれない。

これから自立しなければならない子どもに対してのアドバイスはないか？

(井谷さん) A. 年齢にこだわらず、自立について考える機会を増やしたり外に出ようとする人に対して寄り添って失敗につき合ったりするような姿勢が大切である。

(松尾さん) Q. 教育現場で、健常者と障害者が対等な関係を築くためにはどうしたらよいのか？

(井谷さん) A. 障害者でもいじめられたくないから分けられたいと考えている人がいる。いろいろな人が対等になるための配慮を考えていく必要がある。みんな合理的配慮の中で生きている。共に考えることができる空間を作って同じ方向を向いていくことが必要なのではない。

(菅野さん) 普遍的な話である。『自立』というのは、社会から切り離して考えていくのではなく、頼り先をたくさん作っていくことが重要である。子どもも学校や家庭だけではなく、地域にも広げていくことが大切である。

<全体を通しての意見感想等>

(谷山さん) 『失敗に付き合う』という言葉が心に残った。Q. なぜ星空という名前にしたのか？

(井谷さん) A. 一人一人が輝けるようにしたいと考えた。

(谷山さん) Q. 熟議を大切にするために考えなければならないことは何か？

(菅野さん) A. 「やってみる」ことが大切。やらない理由を探してしまいがち。安全な場を作ることを考えてしまうが、とりあえずやってみることを大切にしている。

(菊池さん) お二人が笑顔で語り合う姿勢は本当に素晴らしい。平野中は、シトラスリボン運動の取組も素晴らしい。子どもたちがボランティアの町であると思ってもらえるように頑張りたい。

(遠藤さん) Q. お二人の明るく前向きな理由を教えてください。

(井谷さん) A. 楽しいから。今の自分だからできることがやれている。いろいろな人と繋がる楽しさを感じている。

(菅野さん) A. これまでの様々な経験を通して、ありのままにしようと思っている。

(吉田さん) 「本当の自立とは、他者の力をどれだけ借りられるのか」という言葉があった。

(井谷さん) バリバラ～障害者情報バラエティー～に出演しているので、ぜひ見ていただきたい。12月2日(金)・9日(金) 2日の再放送は5日(日)

(谷山さん) 平野小中学校での取組→シトラスリボンづくりをし、地域の方に配布している。

その結果、児童・生徒の自尊心が育っている。

(松尾さん) おのみち寺子屋では、夏に100kmを歩くという体験学習、12月からハイブリット寺子屋ということでオンラインと対面の授業を行っている。

(菊池さん) 『学社融合』のためには、このような機会は大切であると感じる。

(遠藤さん) これから、学校がまちづくりの基盤になるのではないかと感じる。学校に地域が入り、地域の中に学校があるという連携が必要となる。

(菅野さん) 今回、ランダムでよかった。他者の力をどれだけ借りられるのかがとても重要だと感

じた。改めて今回のテーマに繋がっている。

(井谷さん) 近い仲間だけではなく、いろんな分野の人と繋がることでより遠くに行ける気がする。



分散会 14

ファシリテーター 柴崎 あい
分散会記録者 徳田 義実

学校内居場所事業と学校外居場所事業

発表者 NPO 法人 FAIRROAD 代表 阪上由香

大阪市内で、学校の中に「学校内居場所」、地域の中に「学校外居場所」をつくる事業を行っている。大会テーマの「ウェル・ビーイング」は、人が自分らしい日常を送っている状態、本人が安心・安全を感じながら暮らせていることだととらえており、居場所事業も日常の中に位置づけることを大事にしている。

まず、「学校内居場所」は「サード・プレイス」であるよう、出入り自由・フラットな関係・会話が中心の場（オルデンバーグの定義より）となることを心がけている。

子ども食堂のようなスティグマ（困難を抱えている子が集うという偏見）を避けるため、高校では生徒が気楽に足を運びやすいように「カフェ」というスタイルをとり、利用無料ではあるがスタッフはエプロンをつけ、オーダーを取るなどして雰囲気づくりを工夫している。

高校と中学校では開所場所や飲食有無などで違いがあるが、安全管理・円滑運営のためにスタッフ最低 2 名の配置を共通して徹底している。現在、運営経費の都合上、高校は週 2 回・中学校は週 1 回の開所だが、子どもたちの「日常」にあるものになるためにも、毎日の開所が理想である。また、中学校のように、図書館、つまり、全生徒に開かれている「情報の源」でもある場所で開所することで、より利用しやすくなるのではないかと考えている。

この事業を始めたのは、塾講師時代、乱暴な言動や無気力な態度ながらも自分の人生について考え、もがいている若者の姿に触れたことや、ようやく話せる関係になったところで経済的な事情により塾に通えなくなって関係が途切れてしまった経験から。「学校の中で会えたら、もっと話を聴くことができたのに」という想いで、学校の中に「居場所」をつくろうと踏み出した。

学校の中で事業を行う上での難しさもあり、責任感の強い先生にとって、生徒の悩みを打ち明けられる大人が自分たちではないことや外部の人間が学校に入ることへの抵抗感を持たれてしまうことも間々ある。成長を重んじる教育の論理と「そのままでもいい」という無為の論理の拮抗と併存は避けられない課題かもしれない。ただ、現代の若者が抱える問題は学校在籍中の 3 年間だけでは発見・解決できるものではなく、学校教育の限界はある。卒業生は、先生方に対して良い報告をしに行きたいと感じているが、社会に出てからのトラブルは相談しにくいと感じていたりする。

学校内居場所事業は「学びのストライクゾーンを広げるためのシンボル」にしていきたいと考えている。そこで人と会うことも大切な「学び」であり、そこで人と関わることで自身が、ウェル・ビーイングを実現する「学び」の第一歩であるとうったえていきたい。

学校外居場所は主対象が小学生になり、週末を中心に開所している。車椅子ユーザーも参加するので、バリアフリーが整備された地域の施設を使用している。地域活動協議会を中心に、保護司、民生委員なども運営に関わってくれている。また、元「居場所」利用者の中学生スタッフのほか、一般のアルバイトが難しい高校生には練習の場になるよう有償ボランティアとして活動してもらい、高校卒業以上の者には中間就労支

	高校	中学校
事業	課題を抱える生徒フォローアップ事業 (大阪府教育庁) 80万~100万程度/1校 予算は学校によって変動。	学校元氣アップ地域本館事業 (大阪府教育委員会) 80万程度/1校 1/3:テスト勉強会 2/3:居場所活動
連携 (学校以外)	教育庁 事業としての連携先はなし。	地域活動協議会・PTA・地域の施設 社協・まちづくりセンター等
開所頻度	週2回(昼休みと放課後)	週1回(昼休みと放課後)
開所場所	空き教室 (相談室/社会科準備室/多目的教室)	図書室 (学校内図書館)
飲食	あり (コロナ中は居場所内での飲食はなし)	なし
スタッフ	FAIRROADスタッフ2名 +大学生+ボランティアスタッフ	FAIRROADスタッフ2名 +連携している人たち1~3名 +居場所の卒業生

援と生活支援を行うかわりに「こちらも手伝ってもらっているからおたがいさま」と伝えながら関わってもらっている。

地域で行う学校外居場所事業は自由度が高く、食事提供をはじめとする幅広い活動を行うことができ、地域の人たちも関わりやすい。学校内居場所にはない保護者との接点も作るができる。

一方で個人情報の扱いが難しい。虐待等を発見することもあり、ソーシャルワークの要素が強いため、行政とも協定を結び、要保護児童対策地域協議会ともひもづけている。支援対象児童等見守り強化事業も活用・実施できており、膨らみ続けている子ども食堂との違いであると認識している。

また、大人の中には、よかれと思って子どもたちに社会的なマナーを指導しようとする方もいて、子どもたちにとっての安心と安全の確保が難しい場面も生じる。関わる人が増えるほど、幅広く考え、ゆるく見守るという想いが揃わなくなるが、考え方の違いを理由に自分たちが排除し合っているのはいけない。多様な考えがあること・多様な生き方があることを知ることを、ユーモアを持って大人たちが話し合い続けられる、風呂敷のような日常を地域につくり出したい。

居場所事業は、民主主義的な場・対話を行える場をつくり続ける取り組み。その価値を可視化したり評価したりすることは難しいかもしれないが、始めてから10年が経ち、居場所を経て、社会で働く若者との交流が続いたりもしている。成人式への出席を負担に感じている卒業生が集い、成人会を開いたりしている。その食事会の席で、かつてはスマホを手放せず、周囲と会話もうまくできなかった子が近況を語り合いながら楽しんでいる姿を見ると、この風景が事業の成果だと感じ、これからも続けていこうと思える原動力になっている。10年やってきたから見えてきたこれらの成果も含め、居場所の意義や価値、必要性をうったえながら事業を続けていきたい。

文化活動からアプローチする地域福祉の取り組み

～つながるはじまる俳句のチカラ インクルーシブ17の実践から～

発表者 松山市社会福祉協議会 森畑裕子

愛媛・松山のすばらしい地域資源に「俳句」がある。「高尚な伝統文化」「テレビのように添削されたりランク付けされたりする」という印象を持つ方もいるかもしれないが、そのようなことはない。

松山市社会福祉協議会では2008年に実施した「福祉ワーカーズスクール」で、市が行う地域福祉のまちづくりに俳句を取り入れた。幅広い福祉関係者の方たちが集い、そこで出会った人たちが俳句を学んだ。俳句を学ぶと、五感を使うようになり、季節をとらえようとしたり、肌で感じたもの・手で触って感じたもの・人とのコミュニケーションによって得られた感情などを意識したりするようになる。心が豊かになる感覚が生まれ、互いの仕事面での新たなコラボレーションのアイデアや人と人とのつながりも生まれた。1年間の事業終了後、現在も「福祉句会」としての活動が続いている。

2016年から2018年に行われた「福祉五七五」という事業では、俳句を地域教育活動の一つとして取り入れ、季語の有無も問わない俳句の投句を呼びかけた。俳句を通して他者への理解が進み、自分の経験を俳句



に詠むことで自分への手紙にもなる、というものだった。春夏秋冬、年に4回、松山市民に限定せずに広く募集し、寄せられた俳句で句集を発行した。

2021年から取り組んでいるのが、福祉体験学習と俳句のコラボ。体験学習後に子どもたちが作文や感想文を書くことは多いが、ここでは、体験したこと・感じたことを俳句に詠んでもらっている。17音での表現には、子どもたちが興味を持ったことや感じたこと、一番印象に残ったことがダイレクトにあらわれやすく、講師にとってふりかえりにもなる。

現在、松山市社会福祉協議会ではボランティア・センターが福祉体験学習を担当し、学習指導要領をふまえながら事業を行っている。子どもたちが数年後には「地域の担い手」としての大人になっていくこと（既に素敵な「地域の担い手」でもある）を意識して、活動の中に民生委員さんや地区社協の方たちに参加してもらって、地域の人たちと一緒に学ぶことができる場にしている。

俳句を作る際には、マルコポ・コム（キムチャンヒさん）が作成したオリジナルのワークシートを利用している。子どもたちは、講師の話や自分たちが体験したことの感想を俳句で表現し、伝えている。「点字器は未来をつくる秋の暮」—これは、点訳ボランティアの講話を聴き、点字体験をした中学生の俳句である。墨字（紙に書かれたり印字されたりした文字）を読むことができない人に対し、それを点字にすることは、その人の未来をつくることであると表現した中学生は、点訳活動を素敵だと感じてくれたのではないかと思う。

2020年度にえひめ子どもチャレンジ支援機構が文部科学省の委託事業として行った「共に学ぶコミュニティ形成実践研究事業」で生まれたのが「インクルーシブ・セブンティーン」。松山市社会福祉協議会の職員として、アドバイザーという立場で関わった。自分自身、健常者だったところから症状が進行して障害者という域まで来たが、その間も目の状態に合わせて自分も周囲も提案や工夫をして俳句を楽しんできた。その経験から、俳句は一番バリアフリーな文化だと思っていた。チャンヒさんからも「俳句と福祉で何かやれないか」というお話があり、この事業に取り組んだ。

俳句を楽しむ仲間が「知りたい」「つながりたい」という想いで関わり、委託事業年度が終わっても継続していけることを目指した。多様な人たちが参加し、一人一人が「当事者である」という意識のもとで活動した。句会では、CIL 星空代表の井谷重人さんが頸椎損傷患者ならではの体験をユーモアたっぷりに俳句に詠み、他のメンバーが「そんな『あるある』が！」「初めて知った！」と驚くような場面もあり、俳句を通して「その人をさらに知る」という経験を重ねていった。

コロナ感染症の影響もあり、実際に集える時もあれば、リモートで句会を開くこともあった。Zoomでは、あごでスマホとPCを駆使する者もいれば、音声読み上げ機能を使う者もいた。また、この事業では、俳句が簡単に作れるワークシートと気持ちを表す季語が並んだ小冊子「俳句のレシピ」を作成した。また、メンバーの中には重度知的障害者のご家族を持つ方がいて、「一緒に俳句作りを楽しみたい」という想いをかなえるべく、物やできごとが描かれたカードや感情をあらわす季語カードを試作して、俳句づくりの幅を広げた。

小学校教員をしているメンバーが俳句クラブの顧問をしていたことから、小学校のクラブ活動にも参加した。ここでは「障害の理解」といった福祉体験学習の立場ではなく、「俳句好きがやってきて一緒に俳句を楽しむ」というもの。お互いの作った俳句の好きなところを伝え合ったりした。

地域福祉への俳句の仕掛けは多様。日本一バリアフリーな文化と福祉とは相思相愛だと考えていて、これからも引き続き展開していきたいと思う。

<質疑応答>

<NPO 法人 FAIRROAD >

Q ソーシャルワークの役割は、前面に出しているのか、それとも見えないようにしているのか？

A ソーシャルワークの機能があることを大事にしつつ、生徒たちが「ソーシャルワークを受けている」と意識させないように気をつけている。相談を受けられる安心感と同時に、「カフェ」「広場」の雰囲気の中でゲームや音楽などの文化的な側面を多く見せるなどして緩和させている。

Q 自宅の納屋を開放して地域の図書室を作った。そこでひと息ついてから登校する小学生の姿もあり、学校図書室もそんな場所になれば良いと感じた。

A 「図書室での居場所事業」に共感してくれる方もいるが、一方で、思い描く昔ながらの「静かな図書室・生徒像」を崩したくない先生方も多い。学校で一番自由度高く使えるはずの図書室が居場所に最も適していると考えており、生徒の最善の利益のためにも、学校の理解を得たい。

Q 本来「サード・プレイス」は学校とは別の場所にあるべきでは？学校図書室ではなく公共図書館でも良いのでは？事業展開に予算獲得の事情が影響している？

A 学校文化に定着させるべく、福祉の予算から教育の予算にシフトしていったが、事業年限もあり、予算もつきにくく、模索している。学校内居場所には「ついでに寄れる」良さがあり、まずは図書室から、子どもたちが「開かれた場所」に足を運ぶ練習をしてほしいと考えている。

<松山市社会福祉協議会>

Q 今取り組んでいる「リアルな福祉体験」とは？

A 従来は講師から話を聴き、その後で疑似体験をする—体育館の中に段差や傾斜、障害物を配置したコースをまわる—が多かったが、マンネリ化していた。リアリティを高めるため、校内の様々な場所に出たり、誘導物やガイドの有無による違いを体感したりしてもらっている。職場や家庭、街中での様子をまとめた事前学習用の動画も作り、日頃のリアルな姿を観てもらったりもしている。

Q 小学校の福祉体験学習の手伝いに行ったことがあるが、俳句を取り入れるのはとても良いと思う。自分も最近吟行を体験し、端的な言葉であらわすことのすごさ・おもしろさを実感している。

A 後で俳句を作るとすると、子どもたちがより講師の話や体験活動での感触・感覚を逃さないように鋭敏になる。想いがあふれ出るように何句も詠む子もいて、一人一人異なる俳句ができあがる。インクルーシブ・セブントーンの活動のように、俳句の世界では「教える—教えられる」「支援する—支援される」関係ではなく、仲間になれる。子どもたちにもそれを感じてもらいたい。

<全体を通しての意見感想等>

- 将来教職を目指している。阪上さんのような外部の方たちと協力し合える教員になりたい。
- 長く受け継がれてきた地域福祉における俳句の活用実践を聴き、先人の取り組みや蓄積に目を向ける必要性を感じた。
- 体験活動の感想を表現するのに、俳句だけではなく、絵本や絵などにあらかず方法で子どもたちの創造（想像）性をひきだしてみたい。

○ さまざまな実践を聴き、閉ざされた学校現場では得られない学びがあった。



分散会 15

ファシリテーター 田邊 裕貴
分散会記録者 今永 泰生

中富良野町教育委員会

ウインターフェスティバル 発表者 千葉駿人

富良野盆地に位置する人口約 4800 人の北海道中富良野町では、ラベンダーの観光や農作物など盛んである。スキー大会を前身としたウインターフェスティバルが平成元年より始まった。イメージキャラクター「ラベンダーの妖精」をつくり、雪を使った様々なイベントに加え、陸上自衛隊の音楽隊の演奏、町内のよさこい団体や郷土芸能団体による演舞披露、更に交流都市である沖永良部島和泊町からエイサーを披露していただくなど、多くの町民が参加していた。

しかし、内容が詰め込まれすぎていること、そして「しなければならない」という制約の中で企画していく閉塞感を感じている中、新型コロナウイルス感染予防という大きな課題が出てきた。単純に中止にするのではなく、雪像コンテスト、地域の魅力を知ってもらうための冬フォトコンペ、沖永良部島和泊町のエイサーや花火のオンライン中継で流すなど、今までの関係性を生かしながら、活動できることを考え実施しており、Youtube でも動画を公開している。動画視聴人数は実施日の翌日までで 1400 人であり、村の人口の 3 分の 1 が視聴していたこととなる。企画参加者へのルールの共通認識が不十分であった、もっと外に向けて町の魅力を発信することをねらいとしたいなど、課題はあるが、本事業はまだ始まったばかりである。



NPO 法人いよココロザシ大学

いよココロザシ大学付属学園 発表者 泉谷 昇

いよココロザシ大学では「誰でも先生、誰でも生徒、どこでもキャンパス」を掲げ、愛媛の魅力創出に個人や企業、NPO がもつ経験や知識、技術を授業化し、学び合える仕組みを作ることをねらいとして設立された。これまで 600 回以上の授業を展開し、3 万人以上が参加してきた。子どもたちの想像力・創造力・表現力などを育む授業を実践してきたことを生かし、親子や企業を巻き込みながら夏休み中に「いよココロザシ大学付属学園（夏）」を実施した。コンセプトは「想像×創造」、子どもたちの第 3 の場所となることをねらいとした。のべ利用者は 793 名、1 日定員は 40 名である。テーブル作り・レゴ作り・宝石石鹸などをはじめ、先入観なしで取り組む名画塗り絵、本物の紙粘土作り、自由な発想を大事にした創作品コレクションなど制作活動が中心となった。また、作るだけでなく壊すことを目的としてカプラの倒壊セレモニーなども実施した。活動には参加してもしなくてもよい。子どもたちのしたいことを自分たちで運営できるようにするなど、自主性を大切にされた。最後は子どもたちが作成したものを美術展という形で展示した。保護者と連絡をこまめにとり、コミュニケーションを大切にしてきた。冬休みには「いよココロザシ大学付属学園（冬）」が始まる予定である。



<質疑応答>

<中富良野町教育委員会>

Q 本事業は企画・運営などスタッフ何名で活動しているのか。

A 中富良野町は高校がないためかジュニアリーダーがいない。子ども会、スポーツ推進委員、社会教育委員、町の青年団、農協や商工会青年部などに動いていただき、実行委員の数は15名~20名程度であり、当日は30名程度になる。

Q 子どもたちはどのように関わってきたのか。

A 子どもたちは参加者として楽しむ側の立場で留まっている。もっと多くのことを求められるかもしれないが、地区の子ども会も活動が活発ではなくなっているため課題となっている。

→ 子どもたちが参加して楽しさを分かってくれば、次回から何らかの形で子どもたちや親が関わってくるかもしれない。しかし、手を広げすぎると、スタッフの数が必要となってくるため更に内容の詰め込み過ぎになってしまうかもしれない。

Q 若者の中富良野町への定着度はどのくらいか。

A 高校は隣の富良野市へ7割が通い、進学校のある旭川市へ通う子もいる。町づくりのアンケートによると、帰りたいが働くところがないとの課題が見えている。家業が農家である若者は帰ってくるが、定着率は高くない。

→ 高校生を参加者として招くことで影響力は大きくなる。愛媛県では定員割れが数年続くと分校となり、更に続くと廃校となる。三崎高校は人数が増えており、北海道からも視察が来ている。

Q 学校へお願いしたことや働きかけはあったのか。

A チラシを配付してもらうようお願いしている。部活単位で参加してもらったこともある。バケツでキャンドルを使うので、キャンドルづくりの依頼もしている。教員は働き方改革の関係で、現在はお願いしていない。10年前は有志に集まってもらっていた。

Q 前任者からどのような思いで本事業を受け継いだのか。熱量の話をしたい。

A 元々は教育委員会とは全く関係のない部署にいた。青年団に所属していたためヒーローショーのヒーローの中にも参加しており、参加への準備はできていたと思う。このような経験が現在の基になっているが、新型コロナの影響を受けて、今後断絶の世代が出るのではないかと危惧している。

Q 北海道は青年団が盛んに行われているのか。

A 北海道では公民館活動が少ない。役場の実情もあるが青年団活動は比較的盛んである。除雪ボランティアなどもある。

Q イベントをするために、SNS発信等はしているのか。

A ホームページやフェイスブック等を活用しようとしたが、長続きしない(青年団が作成している)。個々へ負担が掛かることがネックとなっており、あまり活用できていない。

Q 沖永良部島和泊町との交流の様子やよさについて教えてほしい。

A 花の魅力を発信しているフラワー都市として交流連絡協議会をもっている。担当都市となったときに、訪問等を行って交流が始まった。沖永良部島の子どもたちにとっても島内以外を見るよききっかけとなっている。特産品のマンゴー等をウインターフェスティバルの景品にしている。

Q 動画視聴数は十分ではないか。どの程度の人数を予定していたのか。

A 多い少ないといった指針を作ることができなかった。十分な人数であるとの声もあったが、ネットの影響力を考えると少ないように感じた。どこで納得するのかは難しい。

→ 計画立てても分かりにくいものはある。今回の結果だけでは分からない、今後分かってくると思う。

Q 今年度の実施はどうするのか。

A 現在は新型コロナウイルスが落ち着いているので従来形式で行う予定である。しかし、新型コロナウイ

ルスの感染状況にもよる。オンラインとハイブリッドで行ってみてはどうかとの意見もある。

<NPO法人いよココロザシ大学>

Q カプラの倒壊体験について、カプラ何枚くらい使っているのか、総額いくらだったのか。

A カプラは私たちのものではなく、中央児童館に使われていないカプラを周辺の児童館から募ってもらった。メーカーのカプラは一部であり、他はカプラと同じ規格の大きさの板に切り、みかん箱30箱分作った。木材の費用は助成金を最大限に使った

→ 子どもたちは壊すのが大好き。私の地域の段ボールイベントも壊すときが1番生き生きしている。

Q 子どもたちがココロザシ大学に魅力を感じている。ココロザシ大学の1番の魅力は何か。

A 参加者した人はほとんどが初対面であり、2000人が登録している。事業説明会を実施したときに、「管理しません（管理しない管理）」と伝えた。全部がプログラム通りにはいかない、子どもたちの自主性を大切にしている。部屋は二つ用意し、大人は楽しんでいるから参加したければどうぞというスタイルであった。すべてが自由で1日の行動を子どもたちが決める。ここが参加する目的の一つとなったのではないか。

Q 何もしない子がゲームを持って来るのは許可していたのか。

A 土曜日は利用人数が減ることもあり、保護者と相談の上、持ち込み可としていた。土曜日は、大画面にゲームを流して、eスポーツを実施していた。（松山市からも許可をもらった）

Q インチキ先生の話をしてほしい。

A 子どもたちはすぐに先生と言いたがる。しかし、私は教員免許等を持っていないと伝えると、「じゃあお前はインチキだ」と言われたので、その表現方法を使って「インチキ先生」と名乗るようになった。

Q プログラムの内容は最初からすべて決めていたのか。

A 半分くらいはあらかじめ決めていた。子どもたちのニーズに合わせて繰り返して行ったり、作ったり、何もしない日を設定したりもした。新型コロナの影響で中止になったものもあった。

Q 人員は何名程度で行っているのか。

A 企画の9割は自分が行った（すべての仕事を秋にまわした）。正社員は私を含めて2名、スタッフは美術の先生等（保育士等の資格をもっている）が4名、大学のインターンシップ生が13名参加した。

○ 松山市の児童クラブ（公設）は定員を大きくオーバーしている。費用は多く掛かるが、民間の児童クラブも運営を開始している（需要は多い）。

Q 愛媛県の人が地域のよさを知らないということについて、どのようなことを感じられたのか教えてほしい。

A 20年前に愛媛県にやってきた。CMやTVドラマなどで愛媛県を紹介してきたが、撮影隊が要望するものは特別なものではなく、棚田・路地・裏道など日常のありふれたものである。僻地に行けば行くほど、そのようなよさに気付いていないことが多い。日常に見られる魅力を感じてほしい。

○ 私の住んでいる大三島には移住者が多い。移住者は、辺鄙なところ景色のよいところに魅力を感じているが、地元の人には不思議に感じているようである。われわれはこのよさを活力・自信につなげていく必要がある。大三島分校・伯方分校があるが、海の近くにあることを魅力の一つにしている。サイクリングイベントや古い街並みを紹介するボランティアガイドを担当したりSNSで発信したりするなど、地元の高校生が活躍している。

Q 自主性と想像力との関係についてみなさんの考えを聞きたい。

A ココロザシ大学では「大人っていいだろう」と（嫌味にならないように）言い続けることで、子どもたちの好奇心に意図的に火をつけるようにしてきた。

A 自分たち大学生が背中を見せて、子どもたちにいろいろ体験させていきたい。4泊5日の100キロウォークでも大学生の態度を見せることが、子どもたちの態度につながっていく。

A 学校では時間内で活動を行っていく制限がある。ゆとり教育では時間に余裕をもたせて、子どもたちがじっくり考える時間をとることがねらいであったが、その意図が取り違えられていた。限りある時間の中で、子どもたちの自主性をどのように育てていくか、教員で知恵を出し合っていきたい。

A 学校の中でのある範囲でしか自主性は育めない。例えば伯方島の魅力を考えるときに、まずは関心をもたせることから始める。自分が住んでいるところの魅力を考えさせるときには、様々な体験活動をさせることが大前提である。自主性を育む前に、関心をもたせることが大切である。

A 自主性と自己肯定感はセットであると思う。自主性がないから自己肯定感も高まっていない。原因は教師や大人が準備しすぎているところからきている。

